Veritas NetBackup™ Self Service デバイス構成ガイド

8.1.2

マニュアルバージョン 1

VERITAS™

Veritas NetBackup™ Self Service デバイス構成ガイド

最終更新日: 2018-10-18

マニュアルバージョン: NetBackup 8.1.2

法的通知と登録商標

Veritas Technologies LLC
500 E Middlefield Road
Mountain View, CA 94043

http://www.veritas.com

テクニカルサポート

テクニカルサポートは世界中にサポートセンターを設けています。すべてのサポートサービスは、お客様のサポート契約およびその時点でのエンタープライズテクニカルサポートポリシーに従って提供されます。サポートサービスとテクニカルサポートへの問い合わせ方法については、次の弊社の Web サイトにアクセスしてください。

https://www.veritas.com/support/ja_JP.html

次の URL で Veritas Account の情報を管理できます。

https://my.veritas.com

既存のサポート契約に関する質問については、次に示す地域のサポート契約管理チームに電子メールでお問い合わせください。

世界全域 (日本を除く)	CustomerCare@veritas.com
Japan (日本)	CustomerCare_Japan@veritas.com

マニュアル

マニュアルの最新バージョンがあることを確認してください。各マニュアルには、2 ページに最終更新日付が記載されています。最新のマニュアルは、次のベリタス Web サイトで入手できます。

https://sort.veritas.com/documents

マニュアルに対するご意見

お客様のご意見は弊社の財産です。改善点のご指摘やマニュアルの誤謬脱漏などの報告をお願いします。その際には、マニュアルのタイトル、バージョン、章タイトル、セクションタイトルも合わせてご報告ください。ご意見は次のアドレスに送信してください。

NB.docs@veritas.com

次のベリタスコミュニティサイトでマニュアルの情報を参照したり、質問することもできます。

http://www.veritas.com/community/ja

ベリタスの Service and Operations Readiness Tools (SORT) の表示

ベリタスの Service and Operations Readiness Tools (SORT) は、時間がかかる管理タスクを自動化および簡素化するための情報とツールを提供する Web サイトです。製品によって異なりますが、SORT はインストールとアップグレードの準備、データセンターにおけるリスクの識別、および運用効率の向上を支援します。SORT がお客様の製品に提供できるサービスとツールについては、次のデータシートを参照してください。

https://sort.veritas.com/data/support/SORT_Data_Sheet.pdf

目次

1

ライセンス

この章では以下の項目について説明しています。

フルライセンスの適用

NetBackup Self Service 8.1.2 には、60 日間の試用ライセンスが標準装備されております。実働ライセンスは、Veritas Entitlement Management System から利用可能です。

ライセンスを適用するには、NetBackup Self Service ポータルにアクセスします。[管理(Admin)]>[設定]>[ライセンス]>[ライセンスキーの更新 (Update License Key)]の順に選択します。新しいライセンスキーをコピーアンドペーストします。ライセンスキーを適用したら、Windows サービスを再起動します。アプリケーションがサーバーファーム環境で実行される場合、すべてのアプリケーションプールを再起動する必要があります。

[ライセンス]ページで、ページ上部のメッセージにその他の機能が含まれていないことが報告されます。ただし、完全に構成された NetBackup Self Service ソリューションの操作に必要なすべての機能は含まれています。

メモ: 前提条件および要件についての追加情報を参照できます。詳細については、『NetBackup Self Service インストールガイド』を参照してください。

2

Self Service ソリューションの構成

この章では以下の項目について説明しています。

Self Service ソリューションの構成について

NetBackup Self Service を使用すると、サービスプロバイダは複数の顧客に対し安全かつ分割された方法でセルフサービスのバックアップおよびリストアを提供できるようになります。企業環境では、事業単位およびプロジェクトチームはセルフサービスのバックアップおよびリストアを実行できます。

Self Service リストア機能は有効になっていますが、さらにオンデマンドの今すぐバックアップ機能に対しスケジュールされているセルフサービスのポリシー編集およびサポートを提供することもできます。

注意: NetBackup Self Service に入力される構成データはすべて大文字と小文字が区別されます。NetBackup.で保持される関連データと一致する必要があります。

Self Service ソリューションでは、コンピュータとその所有者のインベントリがサポートされます。

コンピュータインベントリは複数の方法で入力できます。

- ソース非依存 API
- Self Service ポータル

- vCloud Director からのインポート

Self Service では、多くの NetBackup ポリシータイプがサポートされています。Self Service を使用して、テナントのバックアップのニーズのすべてを管理できます。このオプションでは、テナントは独自のバックアップポリシーを作成できます。または、リストアサービスが手動で保持されるバックアップポリシーに基づいて提供されるように Self Service を構成することもできます。

Windows、UNIX、VMware など、登録されたコンピュータおよびその保護形式の記録は、Self Service 内に保持されます。

テナントユーザーは、コンピュータ保護ステータスおよび使用状況を一式のダッシュボード機能を使用して管理します。テナントユーザーは、保護およびリストアへの変更を作成できます。

Self Service スケジュールされたバックアップ

保護を構成すると、ユーザーは自分のバックアップスケジュールを管理できるようになります。このオプションでは、NetBackup ポリシー構成からの抽出が提供され、ユーザーが選択できる精選された一連のバックアップスケジュールが示されます。

構成のチェックリスト

表 2-1 は、初めて Self Service を構成するための推奨される一連の手順を示します。

表 2-1　構成のチェックリスト

場所	アクティビティ
サーバー	NetBackup Self Service ポータルをインストールします (『NetBackup Self Service 8.1.2 インストールガイド』を参照)
	NetBackup Self Service アダプタをインストールします (『NetBackup Self Service 8.1.2 インストールガイド』を参照)
	Windows マスターサーバーに対しリモート PowerShell を構成します
	UNIX マスターサーバーに対し SSH を構成します
ポータル	少なくとも 1 台のバックアップサーバーを作成します
	保護形式を少なくとも 1 つ作成します (必要に応じて)
NetBackup マスターサーバー	テンプレートポリシーを作成します

場所	アクティビティ
ポータル	ユーザーインターフェースを使用してテナントを作成します
	ユーザーインターフェース、API、または vCloud Director インポートを使用してコンピュータを少なくとも 1 つ登録します
	Self Service の主な操作をそれぞれテストします (有効で、該当する場合)。 ■ 保護リクエストを送信し、コンピュータが保護された後に保護を解除します。 ■ 今すぐバックアップのリクエストを送信します。 ■ ファイルのリストアのリクエストを送信します。 ■ VM のリストアのリクエストを送信します。

3

NetBackup マスターサーバーの構成

この章では以下の項目について説明しています。

NetBackup マスターサーバーの構成について

Self Service では、最新のサービスパックを含む NetBackup 7.7 以上が必要です。

システムとの通信が必要な各 NetBackup マスターサーバーを、バックアップサーバーとして構成する必要があります。バックアップサーバーを管理するには、管理ユーザーとして Self Service ポータルにログオンしてから、ホームページ上の[バックアップサーバー(Backup Servers)]タブに移動します。

メモ: vCloud Director 統合構成を使用する場合、NetBackup Self Service を有効にする前に NetBackup を vCloud Director に対して構成する必要があります。VMware vCloud Director は、API バージョン 5.5 をサポートする必要があります。

Windows NetBackup マスターサーバーとの通信の有効化

NetBackup Self Service では、Windows NetBackup マスターサーバーとの通信に Windows PowerShell リモーティングが使用されます。Windows PowerShell はマスターサーバーにインストールされている必要があります。Windows PowerShell は通常、デフォルトでインストールされています。また、PowerShell リモーティングが有効になっている必要があります。詳細情報が利用可能です。

http://technet.microsoft.com/library/hh847859.aspx

Windows NetBackup マスターサーバーとの通信を有効にするには

1. NetBackup マスターサーバーにログオンします。
2. 管理者として Windows PowerShell ウィンドウを起動します。
3. `Enable-PSRemoting -Force` を実行します。
4. 必要なファイアウォールポートを開きます。

   デフォルトで、PowerShell リモーティングではポート 5985 上の HTTP、またはポート 5986 上の HTTPS が使用されます。

詳細情報が利用可能です。

http://technet.microsoft.com/en-us/magazine/ff700227.aspx

Self Service サーバーからのマスターサーバーとの通信が信頼されているドメインアカウントとの通信でない場合、認証されないことがあります。認証を有効にするには、リモートコンピュータを WinRM のローカルコンピュータの信頼されているホストのリストに追加する必要があります。これを実行するには、次のように入力します。

```
winrm set winrm/config/client '@{TrustedHosts="machine1,machine2"}'
```

必要に応じて、カンマで区切られたリストで追加のコンピュータを追加します。

最初のバックアップサーバーを作成した後の、接続のテストについての詳細を参照できます。

p.20 の「バックアップサーバーの構成」を参照してください。

UNIX NetBackup マスターサーバーとの通信の有効化

NetBackup Self Service では、UNIX NetBackup マスターサーバーとの通信に SSH (Secure Shell) が使用されます。SSH の構成は、このガイドの範囲外となります。ただし、NetBackup Self Service では、マスターサーバー上の SSH サーバーとの通信に資格情報が必要です。

- デフォルトで、SSH ではポート 22 が使用されます。

別のポートを指定するには、サーバー名を *server_name*:*port_number* に設定します。たとえば、MyServer:23 です。

- マスターサーバー上の SSH へのログオンに NetBackup Self Service で使用されるユーザーアカウントには、sudo 構成が必要です。
  - ユーザーアカウントでは requiretty を使用しないでください。
  - ユーザーアカウントでは sudo パスワードを要求しないでください。
  - sudo を使用する場合、ユーザーアカウントでは /usr/openv/netbackup/bin および /usr/openv/netbackup/bin/admincmd のすべてのコマンドが実行される必要があります。

サポートされているユーザー認証モードは次のとおりです。

- パスワード
  NetBackup Self Service ではログオン時にユーザー名とパスワードが渡されます。
- 公開鍵
  ユーザーの公開鍵は、マスターサーバー上のユーザーに対し authorized_keys に保存されます。ユーザーの秘密鍵は、OpenSSH 形式で NetBackup Self Service ポータルに保存されます。
- キーボードインタラクティブ
  NetBackup Self Service では、ユーザーのパスワードがキーボードインタラクティブ ssh セッションに送信されます。パスワードは、構成可能なパスワードプロンプトに応えて送信されます。デフォルトのパスワードプロンプトは [Password:] です。

公開鍵認証に対し、NetBackup Self Service および NetBackup マスターサーバーを構成するには

1. PuTTYgen などのキージェネレータを使用して、公開鍵と秘密鍵のペアを作成します。
2. 必要なマスターサーバーユーザーとしてマスターサーバーにログオンします
3. 公開鍵をユーザーの authorized_keys ファイルにマスターサーバーのオペレーティングシステム形式で追加します。

4 秘密鍵をパスフレーズで暗号化された OpenSSH 形式に変換します

```
-----BEGIN RSA PRIVATE KEY-----
Proc-Type: 4,ENCRYPTED
DEK-Info: DES-EDE3-CBC,997295A8E365412F

SIKdyjX4UoDm03kprqfkCGQYc/thmNIlWYztEomjyRaMyEYlh0ZIC9Kx7XnMNnSk
...
MUxIcZW8d8fF3P4s+OLidxG03H6C/AsGLzJtpecjPQA=
-----END RSA PRIVATE KEY-----
```

5 NetBackup Self Service でバックアップサーバーを作成した場合:

- 認証のための[公開鍵]を選択します。
- [ユーザーアカウント]に、マスターサーバーに接続するユーザーアカウントを入力します。
- [OpenSSH 公開鍵 (OpenSSH Private Key)]に暗号化された OpenSSH 形式の秘密鍵を貼り付けます。
- [パスワード]と[パスワードの確認]にパスフレーズを入力します。

最初のバックアップサーバーを作成した後の、接続のテストについての詳細を参照できます。

p.20 の「バックアップサーバーの構成」を参照してください。

NetBackup アプライアンスとの通信の有効化

アプライアンスへの接続は、UNIX マスターサーバーへの接続と同様に構成されますが、キーの構成は使用できません。前に作成したユーザー名とパスワードを使用して、接続を行います。

アプライアンスでシェルメニューにログオンし、新しいユーザーを作成します。

[メインメニュー (Main_Menu)]>[管理 (Manage)]> [NetBackupCLI] > *[UserName の作成]*の順

詳しくは、『NetBackup Appliance Administrator's Guide』の「Creating NetBackup administrator user accounts (NetBackup 管理者ユーザーアカウントの作成)」を参照してください。

REST API を使用した NetBackup マスターサーバーとの通信の有効化

NetBackup Self Service は、マスターサーバーとの一部の通信に NetBackup REST API を使用できます。マスターサーバーはバージョン 8.1.2 以降である必要があります。

基本的な設定

REST API を使用した通信を有効にするには

1. NetBackup Self Service に管理者としてログオンし、[バックアップサーバー (Backup Servers)]タブに移動します。該当するマスターサーバーを選択します。
2. [REST API 接続 (REST API Connection)]セクションの詳細を入力します。

   バックグラウンドタスクは、マスターサーバーとの接続性を自動的に調査します。
3. ジョブが完了したら、ステータスアイコンをクリックして接続性の概要画面を開きます。
4. REST API が正常に接続されていることを確認します。

証明書

NetBackup REST API との通信は、https を経由します。https では、クライアントとサーバーの間に、信頼関係が存在することが必要です。この場合、クライアントは、NetBackup Self Service Web サーバーまたはタスクエンジンサーバーで、サーバーは、NetBackup マスターサーバーです。信頼関係は、証明書を使用して確立されます。

証明書には、3 つのオプションがあります。

1. マスターサーバーは、信頼できる認証局から発行された証明書を使用します。

   NetBackup Self Service Web サーバーには https 接続の信頼が確立されているため、追加の処理は必要ありません。
2. マスターサーバー証明書は、プライベート認証局から発行されるか、自己署名証明書かのいずれかです。Web サーバーとタスクエンジンサーバーの信頼できる証明書ストアに、認証局の証明書を手動でインストールする必要があります。詳しくは、「マスターサーバーから NetBackup Self Service Web サーバーまたはタスクエンジンサーバーに認証局の証明書をインストールするには」を参照してください。
3. 証明書エラーを無視します。
   - NetBackup Self Service を管理者として開き、[バックアップサーバー (Backup Servers)]タブに移動します。
   - マスターサーバーを選択します。[詳細設定の表示 (Show Advanced Settings)]をクリックします。REST API 接続のセクションで、[証明書エラーを無視する (Ignore Certificate Errors)]を確認して、変更を保存します。
     この選択は、問題の原因の 1 つを排除するため、REST API を最初に設定するときに適しています。ただし、REST API の接続が機能するようになったら、信

頼できる証明書のみを使用するようにします。信頼できる証明書が確立されたら、[証明書エラーを無視する (Ignore Certificate Errors)]オプションをオフにします。

信頼できる認証局の証明書のインストール

マスターサーバーから NetBackup Self Service Web サーバーまたはタスクエンジンサーバーに認証局の証明書をインストールするには

1. NetBackup Self Service で次のように行います。
   - [バックアップサーバー (Backup Servers)]タブで、マスターサーバーを選択します。ステータスアイコンをクリックして、構成の概要画面を開きます。
   - [REST の接続ステータス (REST Connection Status)]セクションで、クリックして、使用するコンピュータにマスターサーバーの証明書をダウンロードします。
2. Windows エクスプローラー上の該当する NetBackup Self Service サーバーで、次を実行します。
   - 証明書を特定し、右クリックして開きます。
   - 証明書を確認して、それが正しいことを確認します。
   - [証明書のインストール...]をクリックします。
     - 格納場所を[ローカルコンピュータ]と選択します。
     - 証明書ストア[信頼されたルート証明機関]を参照して、[OK]を選択します。
     - [次へ]を選択します。
     - [完了]を選択します。
3. この処理はマスターサーバーの認証局の証明書を、NetBackup Self Service サーバーにインストールします。これで、サーバーは、マスターサーバーの証明書を信頼するようになりました。
4. NetBackup Self Service に戻り、[バックアップサーバー (Backup Servers)]タブで、マスターサーバーを選択します。[証明書エラーを無視する (Ignore Certificate Errors)]オプションにチェックマークが付いていないことを確認します。
5. 接続性チェックを実行します。引き続きマスターサーバーに接続できることを確認します。

NetBackup テンプレートポリシーの作成

NetBackup ポリシーの作成時には、多くのオプションを使用できます。『NetBackup 管理者ガイドボリューム I』には、バックアップポリシー作成に関するすべての章が含まれています。バックアップポリシー作成について詳しくは、そのマニュアルを参照してください。

Self Service テンプレートポリシーでは、すべての NetBackup ポリシーオプションが使用されないようにしてください。スケジュールされたポリシーの場合、表 3-1 で指定されている情報は Self Service に影響する唯一の項目です。その他の NetBackup ポリシーを構成する場合は、その他すべてのポリシーデータを構成する必要があります。表 3-1 には、NetBackup ポリシー作成画面の関連タブ、および Self Service テンプレートポリシーに必要な対応する情報が詳述されています。NetBackup ポリシーの作成方法について詳しくは、『NetBackup 管理者ガイドボリューム 1』を参照してください。

表 3-1　スケジュールされたポリシーと今すぐバックアップポリシーに必要なポリシー情報

NetBackup ポリシータブ	適用可能なテンプレートポリシー	追加詳細
属性	今すぐバックアップおよびスケジュールされたバックアップ	■ ポリシーを無効化する必要があります。 ■ ストレージオプションを指定する場合、すべてのデータを正常にバックアップするために十分な大きさのものを指定してください。
スケジュール	今すぐバックアップのみ	■ [保持レベル (Retention Levels)]を使用する場合は、[デフォルト (Default)]という名前のスケジュールが必要です。 ■ Self Service では、NetBackup ポリシーで設定される保持値は使用されません。ポリシーの作成時は、Self Service では[デフォルト (Default)]スケジュールの保持レベルが更新されます。 ■ スケジュールを自動的に実行されるように設定しないでください。
クライアント	今すぐバックアップおよびスケジュールされたバックアップ	■ NetBackup Self Service ではクライアント情報が追加されるため、このフィールドは空白にしておきます。

テンプレートポリシーは、ソリューションに対して特に作成する必要があるマスターサーバー上の無効なポリシーです。これらは、保護レベルを使用する場合、または今すぐバックアップ機能を提供する場合のみ必要です。

マスターサーバー上でポリシーの作成を必要とするアクションをユーザーが実行する場合、関連するテンプレートがコピーされ、テナント固有のポリシーが作成されます。ポリシーは、ユーザーのアクションに応じて変更されます。

テンプレートポリシーは、バックアップサーバーとして構成されるすべてのマスターサーバー上で作成する必要があります。これらのポリシーの命名規則では大文字と小文字が区別され、すべて無効にマークされる必要があります。

ポリシータイプ

NetBackup のポリシータイプコード。たとえば、標準の場合は 0、Windows の場合は 13、VMware の場合は 40 となります。

NetBackup ポリシータイプの詳細を参照できます。

p.57 の「NetBackup ポリシー形式のリスト 」を参照してください。

任意のタイプ 40 (VMware) テンプレートポリシーの場合:

- [VMware] タブで、プライマリ仮想マシン ID が[VM 表示名]である必要があります。
- 今すぐバックアップポリシーの[クライアント]タブで、仮想マシン選択が[VMware インテリジェントポリシーの問い合わせを通じて自動的に選択]に設定されている必要があります。
- vCloud Director テンプレートポリシーの場合、[クライアント]タブの[仮想マシンの選択]で [vCloud Director 統合の有効化]を指定する必要があります。

今すぐバックアップテンプレートポリシー

NetBackup Self Service は、今すぐバックアップポリシーに対してデフォルトの NetBackup 保持レベルが使用されるように最初から構成されています。これらが NetBackup で変更される、または異なる保持レベルがユーザーに提供される場合、変更は NetBackup Self Service ポータルで行う必要があります。今すぐバックアップ保持レベルについての詳しい情報を参照できます。

p.29 の「[今すぐバックアップ (Backup Now)]フォームの構成」を参照してください。

タイプ 40 (VMware) 今すぐバックアップテンプレートポリシー

今すぐバックアップテンプレートポリシーの場合、[クライアント]タブの[VM 選択の問い合わせ結果の再利用]の値に関して考慮が必要になります。値をデフォルトの 8 時間のままにしておくと、過去 8 時間以内に作成された仮想マシンで実行される今すぐバックアップアクションが失敗する可能性があります。値をそれより少ない時間、または 0 時間に設定すると、操作は成功することがあります。ただし、この変更により全体のキャッシュが再構築されるため、接続している VMware システムのパフォーマンスに悪影響を与える可能性があります。この値は、システムの予測される使用状況によっては、デフォルトの 8 時間から変更を必要とする場合があります。

4

Self Service の構成

この章では以下の項目について説明しています。

Self Service 構成について

鍵作成および構成タスクの編集は、ホームページのメインパネルから管理できます。

- バックアップサーバー
- 保護
- テナント
- コンピュータ

非テナント関連の管理者はこのホームページパネルを表示できます。

バックアップサーバーの構成

バックアップサーバーは、NetBackup マスターサーバーへの接続を示します。少なくとも 1 台のバックアップサーバーが機能する必要があります。

新しいバックアップサーバーは、ホームページの[バックアップサーバー (Backup Servers)]タブの[バックアップサーバーの追加 (Add Backup Server)]で作成します。ドロップダウンリストを使用すると、さらに、[UNIX/Linux マスターサーバーの追加 (Add UNIX/Linux Master Server)]または[Windows マスターサーバーの追加 (Add Windows Master Server)]を選択できます。必要な詳細情報の入力を補助する、画面に表示されるヘルプも利用できます。

バックアップサーバーが作成されると、メインの[バックアップサーバー (Backup Servers)]タブに戻り、そこで接続性チェックが開始されます。[接続の確認 (Check Connectivity)]アイコンの動く緑色の歯車は、接続性の確認が開始されたことを示します。

チェックに合格すると、以降のアクションは不要になり、バックアップサーバーが使用できるようになります。チェックが不合格になった場合、赤いバツ印をクリックすると不合格の詳細が表示されます。オフラインのサーバーは、[不明 (unknown)]として表示されます。

バックアップサーバーを作成したら、[バックアップサーバー (Backup Servers)]リストから、[詳細の編集 (Edit Details)]、[認証の編集 (Edit Authentication)]、および[バックアップサーバーの削除 (Delete Backup Server)]の 3 つのアクションを使用できます。

表 4-1　バックアップサーバーの設定

項目	詳細
名前 (Name)	ユーザーに表示される名前。
サーバー名 (Server Name)	マスターサーバーのホスト名または完全修飾ドメイン名 (FQDN) (たとえば、`nbumasterserver` または `nbumasterserver.example.com` など)。 代わりに、ポート番号付きでホスト名を指定できます。 UNIX システムの場合、構文は *`hostname`*`:`*`portnumber`* です。たとえば、`nummasterserver:22` の場合、22 は SSH のデフォルトのポート番号です。 Windows システムの場合、URL の構文 `http://`*`hostname`*`:`*`portnumber`*`/wsman` を使用して、ポート番号を指定します。たとえば、`http://nbumasterserver:5985/wsman` または `https://nbumasterserver:5986/wsman` です。
バージョン (Version)	NetBackup マスターサーバーのバージョンが含まれる範囲。 7.7 から 7.7.1 7.7.2 から 8.1.1 8.1.2 以降

項目	詳細
オンライン (Online)	マスターサーバーがオンラインかどうかを示します。計画的なメンテナンスの実行中に、マスターサーバーをオフラインにすることがあります。オフラインのマスターサーバーでは、システムによる処理は行われず、ユーザーによるバックアップやリストアなどの操作の実行も遮断されます。
認証 (Authentication)	UNIX または Linux の場合: UNIX サーバーへの接続時の認証メカニズム。NetBackup Appliance に接続する場合は、[パスワード (Password)]を選択します。 オプションには、[パスワード (Password)]、[キーボードインタラクティブパスワード (Keyboard Interactive Password)]、または[公開キー (Public Key)]があります。 Windows の場合: CredSSP 認証は、ユーザーの資格情報をローカルコンピュータからリモートコンピュータに委任します。 オプションには、[既定値 (Default)]または[CredSSP]があります。
ユーザーアカウントとパスワード (User Account and Password)	UNIX または Linux の場合: マスターサーバーに接続するユーザー。ユーザーは、SSH を使用して接続できる必要があります。 Windows の場合: ユーザーは、リモート PowerShell に接続できる必要があります。
サーバーの日付形式 (Server Date Format)/サーバーの時刻形式 (Server Time Format)	マスターサーバーで期待される日付と時刻の形式。 `ddMMyyyyHHmmss` ■ `dd`: 01 から 31 の日付 ■ `MM`: 01 から 12 の月 ■ `yyyy`: 年を表す 4 桁の数 ■ `HH`: 00 から 23 の時間 ■ `mm`: 00 から 59 の分 ■ `ss`: 00 から 59 の秒 形式の例をリストから選択するか、カスタム形式を入力できます。日付と時刻形式の編集について詳しくは、次の記事を参照してください。 https://docs.microsoft.com/ja-jp/dotnet/standard/base-types/custom-date-and-time-format-strings
サーバーの時間帯 (Server Time Zone)	NetBackup マスターサーバーのタイムゾーン。
URL	NetBackup マスターサーバー API の URL。例: https://masterservername:1556。
ドメイン名 (Domain Name)	ユーザーのドメイン名。

項目	詳細
ドメインタイプ (Domain Type)	ユーザーのドメインタイプ。使用できる値は NIS、NIS+、NT、vx、および unixpwd です。
NetBackup フォルダ (NetBackup Folder)	NetBackup コマンドのマスターサーバー上の物理パス。このパスは、NetBackup がデフォルトの場所にインストールされていない場合にのみ入力する必要があります。UNIX システムのデフォルト値は、/usr/openv/netbackup です。
NetBackup 一時フォルダ (NetBackup Temporary Folder)	NetBackup Self Service 一時ファイルのマスターサーバー上の物理パス。このパスは、NetBackup がデフォルトの場所にインストールされていない場合にのみ入力する必要があります。NetBackup Self Service ユーザーは、このフォルダへの読み取りと書き込みのアクセス権を持ち、フォルダは NetBackup のホワイトリストに載っている必要があります。UNIX システムのデフォルト値は、/usr/openv/netbackup/logs/user_ops です。 Windows システムのデフォルト値は、C:¥Program Files¥Veritas¥NetBackup です。
時間単位のチャンクサイズ (Chunk Size In Hours)	サポートから指示される場合にのみ、この値を変更します。NetBackup Self Service で NetBackup からのバックアップイメージが同期される場合、イメージはこのチャンクサイズのバッチで取得されます。デフォルトのチャンクサイズは 10 時間ですが、多数のバックアップアクティビティがあるビジー状態のシステムでは、少なくなる場合があります。チャンクサイズを減らすと、指定された数のイメージを取得するために NetBackup への呼び出しが多くなります。値が空の場合、デフォルトの 10 になります。
時間単位の最大バックアップ期間 (Maximum Backup Duration In Hours)	サポートから指示される場合にのみ、この値を変更します。最大バックアップ期間は、実行時間が長くなるバックアップに NetBackup Self Service が使用することが予想される最長時間を表します。同期エンジンは、この値をバッファ期間として使用して、長期間のバックアップが確実に検出されるようにします。長時間実行されるバックアップが NetBackup Self Service に同期されない場合は、この期間を延長します。値が空の場合、デフォルトの 24 になります。
プールされた接続を使用 (Use Pooled Connections) (Windows のみ)	サポートから指示される場合にのみ、この値を変更します。PowerShell 接続プールを有効にするかどうかを決定します。パフォーマンスを向上させるために、接続プールはデフォルトで有効になっています。
最小プールサイズ (Minimum Pool Size)	サポートから指示される場合にのみ、この値を変更します。PowerShell 接続プールの最小接続数。値が空の場合、デフォルトの 1 になります。
最大プールサイズ (Maximum Pool Size)	サポートから指示される場合にのみ、この値を変更します。PowerShell 接続プールの最大接続数。値が空の場合、デフォルトの 3 になります。

保護の設定

保護タイプでは、ユーザーがコンピュータを保護できるすべての方法を定義します。すべてのコンピュータのバックアップ必要条件が似通っている場合、保護タイプは 1 つしか必要ありません。一部のコンピュータに別の保護オプションを使用する場合は、各オプションに保護タイプが必要です。さまざまな保護タイプの例として、SQL サーバーまたは仮想マシンと物理コンピュータの混合を指定できます。原則として、サポートする NetBackup のポリシータイプはそれぞれに保護タイプが必要です。

各保護タイプで、複数の管理対象、管理対象外、[今すぐバックアップ (Backup Now)] の保護レベルを定義できます。管理対象と[今すぐバックアップ (Backup Now)]の保護レベルは、コンピュータを保護またはバックアップするときにユーザーに表示されるオプションです。これらのオプションを使用して、各種スケジュール、保持レベル、または NetBackup ポリシーで直接設定できるその他のオプションを設定できます。

管理対象と[今すぐバックアップ (Backup Now)]のそれぞれの保護レベルに、1 つ以上のポリシーを定義します。これらのポリシーは、このレベルを選択するユーザーのためにマスターサーバーで作成するポリシーです。マスターサーバーでポリシーを作成する方法と指定する方法を定義します。管理対象外の各保護レベルには、1 つ以上のポリシーを定義します。これらは、マスターサーバーで手動で作成したポリシーです。

さらに、[今すぐバックアップ (Backup Now)]アクションの利用を有効にする保護レベルを設定できます。保護レベル内でコンピュータを保護しているポリシーを使用しているコンピュータに対しては、この[今すぐバックアップ (Backup Now)]アクションを使用します。

保護定義に変更を加えても NetBackup に自動的に適用されることはありません。この保護タイプを使用しているコンピュータには、変更は適用されません。変更を加えた結果、異なるターゲットポリシーセットになると、既存のコンピュータの保護レベルは不明になります。この変更は黒色のチェックマークで示されます。各コンピュータまたはコンテナの不明な保護レベルポリシーを削除して、修正した保護レベルを再割り当てできます。

保護タイプの作成

ホームページの[保護タイプ (Protection Types)]タブで[追加 (Add)]を選択します。

表 4-2　　保護タイプの設定

項目	詳細
名前	保護タイプを識別する名前。このオプションはユーザーに表示されます。
コード (Code)	この保護タイプの一意のコード。NetBackup ポリシーでは、ポリシー名にこのコードを使用します。例: *CustomerCode*-*Code*-[...]

保護レベルと今すぐバックアップレベルの作成

選択した保護タイプで、関連する[追加 (Add)]オプションをクリックします。[名前 (Name)]、[説明 (Description)]、[色 (Color)]の各プロパティをすべて使用してユーザーのレベルを区別します。他の設定は機能を制御します。

表 4-3　保護レベルと今すぐバックアップレベルの設定

項目	詳細
名前 (Name)	レベル名 (ユーザー用)。
説明 (Description)	異なるレベルからユーザーが決定するときに役立つ説明。
コード (Code)	当該レベルに関連付けられた NetBackup ポリシーを作成するときに使用するコード。コードは、作成したポリシーの名前に含まれます。コードは保護タイプ内で一意にする必要があります。
色 (Color)	色は、さまざまなコンピュータに割り当てるさまざまなレベルを視覚的に区別するために、主にユーザー画面で使用します。
リクエストタイプコード (Request type code)	システムをカスタマイズする必要がなければデフォルト値 (保護レベルは DBNEWBACK、今すぐバックアップレベルは DBBACKNOW) のままにしてください。 **メモ:** この設定は、管理対象外の保護レベルには関連せず、画面には表示されません。管理対象と[今すぐバックアップ (Backup Now)]の保護レベルの場合、[詳細設定の表示 (Show Advanced Settings)]を選択すると、このフィールドを表示できます。
表示 (Visible)	ユーザーに表示するレベルを制御します。 **メモ:** この設定は、管理対象外の保護レベルには関連せず、画面には表示されません。

ポリシーの作成

[保護レベル (Protection Level)]または[今すぐバックアップのレベル (Backup Now Level)]の詳細で、[追加 (Add)]をクリックしてそのレベル内にポリシーを作成します。

管理対象の保護レベルには、[スケジュール済み (Scheduled)]、[ファイル選択時にスケジュール済み (Scheduled with File Selection)]、[即時 (Immediate)]、および[ファイル選択直後 (Immediate with File Selection)]のオプションが用意されています。[今

すぐバックアップ (Backup Now)]の保護レベルには、[即時 (Immediate)]と[ファイル選択直後 (Immediate with File Selection)]のオプションがあります。

ファイル保護ポリシーを使うと、ターゲットコンピュータのファイルやフォルダのリストを保護できます。ファイル保護は、標準 (0) と MS-Windows (13) のポリシータイプにのみ使用できます。[即時 (Immediate)]のポリシーは、実行中のスケジュール設定されたポリシーに追加するのではなく、新しいポリシーを使用した 1 回限りのバックアップとして実行されます。

[ポリシー (Policy)]で、そのポリシーの[コード (Code)]を設定できます。コードおよび親保護タイプの組み合わせと保護レベルのコードで作成した[ターゲットポリシー名 (Target Policy Name)]も表示できます。

表 4-4　　ポリシーの設定

項目	詳細
名前	管理にのみ使用します。ユーザーには表示されません。
コード (Code)	コードは、コードを設定するレベル内で一意である必要があります。NetBackup ポリシーでは、ポリシー名にこのコードを使用します。例: *CustomerCode-Code*-[...]レベル内に 1 つしかポリシーがない場合、コードは空白のままにできます。
ターゲットポリシー名 (Target Policy Name)	編集はできません。このフィールドには、ユーザーが当該レベルを選択したときにマスターサーバーで作成したターゲットポリシーの名前の例が表示されます。名前は、保護タイプ、レベル (保護レベルまたは[今すぐバックアップ (Backup Now)])、ポリシーコードの 3 つのコードから成ります。 **メモ:** この設定は、管理対象外の保護レベルには関連せず、画面には表示されません。
ポリシー名	この設定は、管理対象外の保護レベルにのみ使用されます。ポリシーは、カタログ内のどのバックアップを使用して信号機の状態を計算するのかを決定します。正確なポリシー名を指定するか、* を使用して任意のポリシーのバックアップに一致するようにします。

項目	詳細
テンプレート名 (Template Name)	ターゲットポリシーを作成するためにコピーする、マスターサーバーに存在するテンプレートポリシーの名前。デフォルトの名前を受け入れるか、既存のテンプレートから選択するか、後で作成するテンプレート名を指定できます。 **メモ:** この設定は、管理対象外の保護レベルには関連せず、画面には表示されません。 詳細情報が利用可能です。 p.16 の「NetBackup テンプレートポリシーの作成」を参照してください。
ポリシータイプ (Policy Type)	テンプレートポリシーの NetBackup ポリシータイプを指定する必要があります。 **メモ:** この設定は、管理対象外の保護レベルには関連せず、画面には表示されません。
警告 (時間) (Warning (hours))	コンピュータの信号機の状態を計算する場合に使用します。詳細情報が利用可能です。 フィールドが空白のままの場合、バックアップのないコンピュータには、注意喚起のためのフラグが付きます。フィールドの値を指定した場合は、指定した時間内に適切なポリシー名を使用したバックアップが実行されないと、注意喚起のためのフラグがコンピュータに付きます。 p.60 の「ダッシュボードの信号機のステータスと使用方法について」を参照してください。
1 つのクライアントのバックアップスケジュール名 (Single Client Backup Schedule Name)	このフィールドに値を入力した場合、この[保護レベル (Protection Level)]でコンピュータが保護されると、保護レベルが[今すぐバックアップ (Backup Now)]オプションとして表示されます。このフィールドは、1 台のコンピュータのバックアップが開始されたときに使うスケジュールの名前を指定します。 **メモ:** このフィールドは、スケジュール設定されたポリシーにのみ適用されます。
ストレージライフサイクルポリシー名 (Storage Lifecycle Policy Name)	[テンプレート (Template)]ポリシーをコピーするときに使うストレージライフサイクルポリシーの名前。

項目	詳細
VM ファイルの復元 (VM File Restore)	仮想マシンのバックアップが、ファイルを復元できるようにするための情報を抽出したかどうかを判断するために、このフィールドを使用します。 このフィールドは、VMware または Hyper-V のポリシーでのみ利用可能です。
クライアント選択タイプ (Client Selection Type)	このフィールドは、VMware ポリシーでコンピュータを識別する方法を選択するために使用します。オプションは次のとおりです。 ■ [クライアントベースの表示名 (Client-Based Display Name)]: クライアントリストと VM 表示名を使用します。 ■ [クライアントベースのホスト名 (Client-Based Hostname)]: クライアントリストとホスト名、または NetBackup クライアント名を使用します。 ■ [クエリー表示名 (Query Display Name)]: VMware Intelligent Policy を使用し、VM 表示名を使用します。このオプションはデフォルトです。 ■ [クエリーホスト名 (Query Hostname)]: VMware Intelligent Policy とホスト名、または NetBackup クライアント名を使用します。 vCloud Director インポートを使用した場合は、[クエリー表示名 (Query Display Name)]を使用する必要があります。このオプションにより、vApp と vDC の保護と、VM 表示名を取得するだけのインポートが可能になります。 このフィールドは、VMware または Hyper-V のポリシーでのみ利用可能です。

[今すぐバックアップ (Backup Now)]レベル内で作成したポリシーは、必ず[すぐに実行 (Run Immediately)]に設定します。[今すぐバックアップ (Backup Now)]ポリシーでは、[警告 (時間) (Warning (hours))]オプションは設定できません。管理対象の保護レベルには、[すぐに実行 (Run Immediately)]以外のポリシーを 1 つ以上作成してユーザーが選択できるようにする必要があります。

スケジュールの上書き

コンピュータを保護するポリシーの作成時に、別の保護レベルの変更スケジュール情報が必要になる場合があります。このオプションは、マスターサーバーで作成するテンプレートポリシーの数を減らすのに役立ちます。スケジュールの上書きにより、さまざまな変更を

加えることができます。[スケジュールの上書きの追加 (Add Schedule Override)]を使用して、変更する各スケジュールの上書きを作成します。

表 4-5 スケジュールの上書きの設定

項目	詳細
名前 (Name)	変更するスケジュールの名前。スケジュールは、テンプレートポリシーに存在する必要があります。リストから選択するか、名前を入力できます。
ストレージライフサイクルポリシー名の上書き (Override Storage Lifecycle Policy Name)	このオプションを選択した場合は、このスケジュールで使用するストレージライフサイクルポリシーの名前を選択または入力します。このオプションは、[保持レベルの上書き (Override Retention Level)]と一緒に使用できません。
保持レベルの上書き (Override Retention Level)	このオプションを選択した場合、保持レベルを選択するか、保持レベルに関連付けられている番号を入力できます。このオプションは、[ストレージライフサイクルポリシー名の上書き (Override Storage Lifecycle Policy Name)]と一緒には使用できません。
間隔の上書き (Override Frequency)	このオプションを選択した場合、スケジュールを実行する間隔を設定できます。
バックアップ用ウィンドウの上書き (Override Backup Window)	このオプションを選択した場合、スケジュールのバックアップウィンドウを設定できます。マウスを使用してグリッドでウィンドウを作成するか、詳細な設定を使用できます。値は、スケジュールに関連付けられているバックアップウィンドウを完全に置き換えます。

レベル内の複数のポリシー

1 つのレベルに複数のポリシーを指定できます。たとえば、データベースとオペレーティングシステムの両方のバックアップを作成するポリシーでデータベースサーバーを保護します。

保護レベルと関連ポリシーを追加したら、[保護 (Protection)]タブで[更新 (Refresh)]をクリックします。この処理を行うと、当該データが NetBackup マスターサーバーのポリシーと合致します。[更新 (Refresh)]アイコンの歯車が緑色のアニメーションで表示されます。このように表示が変わったら、チェックはアクティブです。このチェックでは、システムで定義済みの各バックアップサーバーで保護レベルに対応するテンプレートポリシーを確認します。システムは理対象外の保護レベルをチェックしないことに注意してください。不明なテンプレートポリシーは、画面に赤色の十字で表示されます。このアイコンをクリックすると、作成する必要があるテンプレートポリシーに関する詳細が表示されます。不明なテ

ンプレートポリシーを作成したら、「更新」してポリシーが正しいことを確認できます。テンプレートポリシーの作成について詳しくは、「NetBackup テンプレートポリシーの作成」を参照してください。

p.16 の「NetBackup テンプレートポリシーの作成」を参照してください。

［今すぐバックアップ (Backup Now)］フォームの構成

［今すぐバックアップ (Backup Now)］リクエストにより、事前定義済みのテンプレートから一時ポリシーを作成し、オンデマンドでコンピュータのバックアップを作成できます。次をサポートするリクエストを構成できます。

- ストレージライフサイクルポリシー (SLP) を持つポリシー
- バックアップ保持の設定を許可するスケジュールを持つポリシー (デフォルトの操作)

標準装備されているリクエストフォーム (リクエストタイプ) は、各バージョンのアップグレードで上書きされます。編集する前に、［今すぐバックアップ (Backup Now)］フォームのコピーを作成する必要があります。完了すると、すべての［今すぐバックアップ (Backup Now)］保護レベルを、新しいリクエストフォームのコードを参照するように更新できます。詳細情報が利用可能です。

p.41 の「リクエストフォームの作成またはカスタマイズ」を参照してください。

NetBackup Self Service は一連のデフォルトの保持レベルを事前インストールします。それらは次に示すように修正できます。

デフォルトの保持レベルを修正するには

1. ［管理 (Admin)］、［リクエストと承認 (Request & Approval)］、［リクエストタイプ (Request Type)］、［今すぐバックアップ (Backup Now) (DBBACKNOW)］の順に移動します。
2. ［フォーム (Form)］タブをクリックしてから［バックアップ保持 (Backup retention)］フィールドをクリックします。
3. ページの下部にある［構成 (Configuration)］タブをクリックします。
4. ［項目 (Items)］フィールドに、［今すぐバックアップ (Backup Now)］リクエストフォームに入力可能な保持レベルのリストが表示されます。

ごみ箱アイコンを使用して既存のレベルを削除したり、新しいレベルを追加したりできます。［コード (Code)］は NetBackup 保持数と合致する必要があり、［説明 (Description)］が表示されます。

［今すぐバックアップ (Backup Now)］リクエストで SLP を使用するには、NetBackup Self Service フォームを次のように修正する必要があります。

SLP 用に NetBackup Self Service フォームを修正するには

1. ［管理 (Admin)］、［リクエストと承認 (Request & Approval)］、［リクエストタイプ (Request Type)］、［今すぐバックアップ (Backup Now) (DBBACKNOW)］の順に移動します。
2. ［フォーム (Form)］タブをクリックし、［バックアップ保持 (Backup Retention)］または［ストレージライフサイクルポリシー (Storage Lifecycle Policy)］ラジオボタンフィールドを選択します。このオプションは、BackupRetentionRadio のコードです。このフィールドはユーザーに表示されず、デフォルトが［バックアップ保持 (Backup Retention)］であることに注意してください。
3. ［構成 (Configuration)］タブをクリックし、選択した SLP でデフォルトを SLP に変更します。
4. ［リクエストタイプ (Request Type)］を保存します。

次回［今すぐバックアップ (Backup Now)］が開始されたとき、フォームによって SLP を選択するようにメッセージが表示されます。ユーザーは、コンピュータに登録されているバックアップサーバー (マスターサーバー上) にある、利用可能なすべての SLP から選択できます。

メモ: スクリプトをさらにカスタマイズすることにより、ユーザーの選択肢として表示される SLP のリストを制限することができます。

NSSINSTALLFOLDER¥NetBackupAdapterServices¥PowerShellScripts¥FlexiField¥DB-Get-StorageLifecyclePolicies を参照してください。

［今すぐバックアップ (Backup Now)］リクエストでユーザーが［SLP］または［保持 (Retentions)］のいずれかの使用を選択できるようにするには、ラジオボタンを表示する手順を実行します。

1. ［管理 (Admin)］、［リクエストと承認 (Request & Approval)］、［リクエストタイプ (Request Type)］、［今すぐバックアップ (Backup Now) (DBBACKNOW)］の順に移動します。
2. ［役割 (Roles)］タブを選択します。
3. リクエスタの役割を選択したら、［BackupRetentionRadio］フィールドで［非表示 (Hide)］チェックボックスのチェックをはずします。
4. ［リクエストタイプ (Request Type)］を保存します。

次回［今すぐバックアップ (Backup Now)］を開始したときに、［SLP］または［保持 (Retentions)］を選択できます。

テナントの構成

テナントは組織単位で、少なくとも 1 つのテナントが存在する必要があります。テナントを作成するには、ホームページの[テナント]タブの[テナントを追加]ボタンを使用します。テナントの最初の (管理者レベル) ユーザーが同時に作成されます。vCloud Director インポートソースが定義されている場合、テナントの資格情報を設定できます。[OK] をクリックすると、テナントレコード、関連するテナント統合設定、およびユーザーレコードがデータベースに追加されます。

テナントの詳細を編集するには、[管理 (Admin)]>[組織]>[テナント]の順に選択します。テナント作成時に設定されるテナントの [顧客コード]を[詳細]タブで表示できます。テナントに関連付けられているすべてのユーザーを [ユーザー]タブで表示できます。テナントレベル統合設定は、[統合]タブで使用可能です。vCloud Director 資格情報および追加の vCloud Director インポートもここで設定できます。テナント管理者は、ホームページ vCloud Director インフラストラクチャツリービューノードの変更機能を使用して、更新された vCloud Director パスワードを必要に応じて続いて設定できます。テナントレベルのテーマは、[テーマ (Themes)]タブで実行できます。

API を使用してテナントを作成することもできます。テナントおよびそのユーザーの作成を自動化するための開始点として PowerShell スクリプトが提供されています。ここでは Front Office SDK を使用して、パブリック Web サービスを呼び出します。

SDK について詳しくは、ヘルプファイルが参照できます。ヘルプファイルは、NetBackup Self Service ポータルのインストール場所にあります。デフォルトで、ファイルは `C:¥Program Files¥Biomni¥Front Office 8.5¥Sdk¥` に置かれます。Microsoft 開発者は SDK を使用する必要があります。Microsoft 以外の開発者は Web サービスを直接呼び出すことができます。URL は、[管理 (Admin)]>[サポート]> [構成チェック (Configuration Check)]の順に移動し[サーバー]タブのパブリック Web サービスセクションにあります。Web サービスは `DirectaApi.svc` です。

注意: テナントをポータル管理セクション([管理 (Admin)]>[組織]>[テナントを追加]の順) で直接作成しないでください。この画面からテナントを作成すると、必要な Self Service データのすべてが作成されません。テナントを[テナントを追加]フォーム (ホームページ上にある) から作成するか、API を使用します。

テナントの無効化

テナントを無効化するには:

1. ［管理 (Admin)］>［組織］>［テナント］の順に移動します。
2. テナントを無効化します。

   エントリページからの特定のテナント行の右側にある［無効化 (Deactivate)］リンクを使用してテナントを無効化します。または、テナントレコードの［アクティブ］のチェックボックスのチェックを外して、［詳細］タブからテナントを無効化します。

   このアクションによりテナントユーザーがログオンできなくなります。
3. すべてのコンピュータ、バックアップ、保護、および使用状況データが Self Service データベースに保持されます。
4. NetBackup のテナントのすべてのポリシーを削除します。

   ポリシーを特定するには、無効化されたテナントの顧客コードで始まるポリシーを確認します。

ユーザーの追加

追加のユーザーをテナントに追加するには、多くの方法があります。

- ［管理 (Admin)］>［組織］>［テナント］>［ユーザー］タブに移動し、ポータルを使用して手動で
- Active Directory (［管理 (Admin)］>［組織］>［ユーザー］の順に選択し、［Active Directory のインポート (Import Active Directory)］を右クリックする)。コストセンターコードは、テナントレコードのものと同じである必要があります。
- CSV を使用したマスターデータインポート (［管理 (Admin)］>［組織］>［ユーザー］の順に選択し、［ユーザーのインポート/エクスポート (Import / Export Users)］を右クリックし、［ファイルテンプレートのインポート (Import File Template)］の［ユーザー］タブを使用)。コストセンターコードは、テナントレコードのものと同じである必要があります。
- API の使用

メモ: ユーザーがテナントに関連付けられると、この関連付けは変更できません。

ユーザーレコードを無効化して、システムにアクセスできないようにすることができます。フォーム認証を使用している場合、多くの基準を使用してパスワードルールを定義できます。これらのルールは、［管理 (Admin)］>［設定］>［システム構成］の順で構成できます。

`Administrator` アクセスプロファイルを持つテナントユーザーは、独自のユーザーレコードを管理できます。

アクセス権

デフォルトでは、すべてのユーザーはテナントに登録しているすべてのコンピュータで可能な処理すべてを実行できます。使用できる機能は、コンピュータがサポートする機能によって異なります。すべてのユーザーはテナントのデータ使用量を月ごとに表示できます。利用可能な処理は、全体、テナント単位、ユーザー単位の 3 つのレベルで制御できます。

これらのアクセス権の制御は、[NetBackup Adapter のアクセス権 (NetBackup Adapter Access Rights)]セクションで[管理 (Admin)]、[設定 (Settings)]、[統合設定 (Integration Settings)]の順に選択して設定します。アクセス権には、[今すぐバックアップを許可 (Allow Backup Now)]、[マシンの保護を許可 (Allow Protect Machine)]、[ファイルのリストアを許可 (Allow Restore File)]、[VM のリストアを許可 (Allow Restore Vm)]、[マシンの保護解除を許可 (Allow Unprotect Machine)]、[ファイルリストアの登録を許可 (Allow Register for File Restore)]、[保護の登録を許可 (Allow Register for Protection)]、[SQL のリストアを許可 (Allow Restore SQL)]、[Oracle のリストアを許可 (Allow Restore Oracle)]、[使用状況レポートを許可 (Allow Usage Report)]があります。

すべてのユーザーの処理を全体的に有効または無効にするには

1. [NetBackup Adapter のアクセス権 (NetBackup Adapter Access Rights)]セクションで必要なアクセス権をクリックします。
2. [値 (Value)]フィールドで[有効 (Enabled)]または[無効 (Disabled)]を選択します。

   [テナントの上書きを許可 (Allow Tenant Override)]にチェックマークを付けていないことを確認します。

   [ユーザーの上書きを許可 (Allow User Override)]を[(許可しない)]に設定していることを確認します。
3. さまざまなテナントでさまざまな処理を実行できるようにするには、次の操作をします。
   - [NetBackup Adapter のアクセス権 (NetBackup Adapter Access Rights)]セクションで必要なアクセス権をクリックします。
   - [値 (Value)]フィールドで[有効 (Enabled)]または[無効 (Disabled)]を選択します。この設定は、既存のテナントでも新しいテナントでもデフォルトの設定です。
   - [テナントの上書きを許可 (Allow Tenant Override)]にチェックマークを付けます。
     [ユーザーの上書きを許可 (Allow User Override)]を[許可しない (None)]に設定していることを確認します。

すべてのテナントにアクセスできる、テナント以外に関連付けられた管理者のみがこの値を変更できます。

各テナントにアクセス権の値を設定するには

1. [テナント管理 (Tenant Admin)]画面で[統合 (Integration)]タブを選択します。
2. [管理 (Admin)]、[所属 (Organization)]、[テナント (Tenant)]、[統合 (Integration)]の順に選択します。
3. [NetBackup Adapter のアクセス権 (NetBackup Adapter Access Rights)]セクションで必要なアクセス権をクリックします。
4. [値 (Value)]フィールドで[有効 (Enabled)]または[無効 (Disabled)]を選択します。

さまざまなユーザーがさまざまな処理を実行できるようにするには

1. [NetBackup Adapter のアクセス権 (NetBackup Adapter Access Rights)]セクションで必要なアクセス権をクリックします。
2. [値 (Value)]フィールドで[有効 (Enabled)]または[無効 (Disabled)]を選択します。この設定は、既存のユーザーでも新しいユーザーでもデフォルトの設定です。
3. [テナントの上書きを許可 (Allow Tenant Override)]にチェックマークを付けていないことを確認します。
4. [ユーザーの上書きを許可 (Allow User Override)]を[管理者が代行 (For User)]に設定します。

[管理者が代行 (For User)]の上書きを選択した場合は、次の場所で値を変更できます。

- [ユーザー管理 (User Administration)]の[統合 (Integration)]タブ ([管理 (Admin)]、[所属 (Organization)]、[ユーザー (User)]、[統合 (Integration)]の順に選択) で管理者ユーザーが変更
- [テナントユーザー管理 (Tenant User Administration)]の[統合 (Integration)]タブ ([管理 (Admin)]、[所属 (Organization)]、[テナント (Tenant)]、[ユーザー (Users)]、[ユーザーの選択 (Select User)]、[統合 (Integration)]の順に選択) で管理者ユーザーが変更
- テナントの[ユーザーメンテナンス (User Maintenance)]画面の[統合 (Integration)]タブ ([管理 (Admin)]、[ユーザー管理 (User Management)]、[ユーザーの選択 (Select User)]、[統合 (Integration)]の順に選択) でテナント管理者が変更
  - [NetBackup Adapter のアクセス権 (NetBackup Adapter Access Rights)]セクションで必要なアクセス権をクリックします。
  - [値 (Value)]フィールドで[有効 (Enabled)]または[無効 (Disabled)]を選択します。

[ユーザーによる上書き (By User override)]オプションは選択しないでください。

コンピュータの登録

使用するコンピュータは NetBackup Self Service に登録する必要があります。この要件には、NetBackup で使用するための UI および構成データの表示名が含まれます。

コンピュータの登録には、ユーザーインターフェース、API を使用した方法、または vCloud Director インポートで直接行う方法の 3 つがあります。単一のテナントにはコンピュータの複数のソースを含めることができます。たとえば、vCloud Director からインポートされた仮想マシンと API を使用してインポートされた物理コンピュータです。

ユーザーインターフェースを使用したコンピュータの登録

コンピュータを登録するには、ホームページの[コンピュータ (Computers)]タブの[コンピュータを登録 (Register Computer)]から行います。データの完了をサポートするためにヘルプテキストを参照できます。入力中または[OK]をクリックしたときにフィールドのデータが正しいことが検証されます。

コンピュータ登録を削除するには、ホームページの[コンピュータ]タブに移動し、[登録の削除 (Remove Registration)]リンクを使用します。コンピュータ登録は編集できないため、変更が必要な場合はコンピュータ登録を削除し、再作成することをお勧めします。コンピュータ登録を再作成する場合、同じコンピュータコードを使用してください。

コンピュータ登録プロセスには、NetBackup からの保護データおよびイメージデータの自動更新が含まれます。保護データは、スケジュールまたは一回限りの今すぐバックアップタスクによって保護されている内容を示します。リストのコンピュータ行から[NetBackup データの更新 (Refresh NetBackup data)]をクリックすると、コンピュータの保護イメージとバックアップイメージを同期することができます。 通常、同期に手動介入は不要です。例外は、新しい保護ポリシーからのイメージ、または手動で作成されたイメージをすぐに表示する場合です。

API を使用したコンピュータの登録

API は、コンピュータ詳細の自動インポートまたは一括インポートに使用できます。SDK はクライアントが .NET に書き込まれるようにし、API の推奨される使用方法です。ただし、REST API は Microsoft 環境外で使用可能です。

インストールディレクトリの SDK マニュアルを参照してください。

vCloud Director インポートによる登録

vCloud 階層を vCloud Director から自動的にインポートし、コンピュータを NetBackup Self Service に登録できます。インポートは、個別の資格情報を使用してテナントベースによりテナントで実行されます。

vCloud Director インポートでは、階層がインポートされる vCloud Director インスタンスを定義する必要があります。さらに、それと関連付ける NetBackup Self Service 設定を指定する必要があります。

インポートでは、インポートされる階層と関連付けられる[保護タイプ (Protection Type)]と[バックアップサーバー (Backup Server)]を指定する必要があります。

インポートではオプションで、仮想データセンター (vDC) フィルタリングを使用できます。vDC フィルタリングが有効になっている場合、フィルタの vDC のみがインポートされます。フィルタリングはテナントベースごとに発生し、vDC がインポートされるようにそれぞれをフィルタと設定する必要があります。各 vDC は単一テナントのフィルタでのみ表示される必要があります。

vDC フィルタリングが無効になっている場合、インポート資格情報によって表示されるすべての vDC がインポートされます。

新しい vCloud Director インポートを作成するには、[インポート]タブの [インポートを追加]オプションを使用します。画面のプロンプトに従って、対応する[vCloud インポート統合設定 (vCloud Import Integration Setting)]セクションを作成します。

インポートを有効にするには、テナントレベルでログオン資格情報を指定する必要があります。vCloud Director の資格情報は組織に対して定義され、[全般 (General)]>[管理者ビュー (Adinistrator View)]に権限がある必要があります。単一のテナントのみが vCloud Director 組織からコンピュータをインポートできます。

新しいテナントを作成する場合、テナント作成プロセスの一部として[テナントを追加]フォームで単一の vCloud Director システムに対する資格情報の指定がサポートされます。追加の資格情報は、API を使用するか、または [テナント]管理の[統合設定]タブを使用して入力できます。最初のパスワードが設定されると、テナント管理者は vCloud Director へのアクセスに使用される vCloud Director パスワードを更新できます。テナント管理者は、コンピュータリストのルートノードのドロップダウンを使用してパスワードを更新します。

表 4-6 vCloud Director インポートで使用される統合設定

項目	詳細
vCloud Api	この値は、`https://hostname/api/` 形式の vCloud Director API の URL に設定する必要があります。
場所	コンピュータが登録される NetBackup バックアップサーバーの名前。
オンライン	vCloud Director インスタンスがオンラインとみなされるかどうかを示します。Self Service では、オンラインでないインスタンスは使用されません。
Ignore SSL Certificate Errors (SSL 証明書エラーを無視する)	このオプションを使用すると、Self Service で SSL 証明書が有効でない vCloud Director インスタンスに接続できるようになります。

項目	詳細
vCloud *ユーザー名*	テナントが vCloud Director API への接続に使用するユーザー名。各テナントに独自の資格情報がある必要があります。*userid@vOrg* の形式にする必要があります。テナントレベルでのみ設定する必要があります。
vCloud *パスワード*	テナントの対応する vCloud Director パスワード。テナントレベルでのみ設定する必要があります。
保護タイプコード	インポートされたコンピュータに適用される保護タイプ。
Use vDC Filter (vDCフィルタを使用する)	vDC フィルタリングを有効にするために設定します。
vDC フィルタ	インポート時に vDC に適用されるフィルタ。このフィルタはカンマ区切りのリストで、vDC 名は大文字と小文字が区別されます。テナントレベルでのみ設定します。
表示名	ユーザーに表示される名前。この名前は、ホームページのデフォルトのビューに表示されます。
メタデータを含める	インポート時にメタデータを含めるかどうかを判断します。

メモ: vCloud Director インポートは、単一のセクションにグループ化される統合設定として Self Service に存在します。単一のセクションにより、個別の vCloud Director インポートがそれぞれ定義されます。それぞれに[追加 (Add)]機能を使用する場合、統合設定がバックグラウンドで作成されます。

これらは[統合の設定 (Integration Settings)]でのみ編集または削除できます。ただし、[統合の設定 (Integration Settings)]で直接値を編集する場合は、検証は実行されないため、注意が必要です。

vCloud Director からインポートされるコンピュータが 2 つのペインのツリービューのテナントユーザーに表示されます。コンピュータが親コンテナ内に一覧表示されます。コンピュータが vCloud からの場合、コンテナは左のペインに表示されます。下位レベルのコンテナをクリックすると、内容が右のペインに表示されます。保護はコンテナレベルまたはコンピュータレベルで適用できます。非 vCloud Director コンピュータのみが登録されている場合、これらのコンピュータは全幅リストに表示されます。

ホームページの構成

ホームページはダッシュボードとして表示されます。ホームページにより、ユーザーはインベントリ (コンピュータ) の現在のステータスを表示し、マウスクリックだけでアクションを開始できるようになります。

メインビューは、テナントユーザーに[保護 (Protection)]ダッシュボードまたは[使用状況 (Usage)]ダッシュボードのいずれかの、2 つのタブとして表示されます。このビューは、上部のセクションのいずれかをクリックすると切り替わります。上部のセクションでは、ステータス、使用状況、および保護の概要が信号機の形式で表示されます。上部のセクションは無効化できます。

非テナントまたは非管理者ビューには、すべてのテナントのコンピュータの合計が、信号機形式のステータスで表示されます。すべてのテナントの使用状況の合計が、[使用状況 (Usage)]セクションに表示されます。非テナント管理者用のメインビューには、概略ダッシュボード、構成タブ、監視タブ、テナントタブ別の使用状況が含まれます。

これらのパネルはインストールされ、完全に構成されていますが、設定はサービスカタログ ([管理 (Admin)]、[サービスカタログおよび通知 (Service Catalogue & Notices)]、[サービスカタログ (Service Catalog)]) で表示できます。

ホームページの統合設定

表示される統合設定は、[状態 (Status)]および[使用方法 (Usage)]パネルの表示と内容に影響します。

[管理 (Admin)]、[設定 (Settings)]、[統合設定 (Integration Settings)]または[管理 (Admin)]、[所属 (Organization)]、[テナント (Tenant)]、[統合 (Integration)]の順に選択すると、関連する統合設定が表示されます。

表 4-7 NetBackup Adapter

項目	詳細
契約領域 (TB)	使用領域の表示を拡大し、テナントレベルで管理できます。
使用状況保持期間 (月)	使用状況の傾向グラフやリストに表示しておく月数。
[信号機表示 (Show Traffic Lights)]タイル	この設定は、ホームページに信号機を表示するかどうかを決定します。
[合計使用量の表示 (Show Consumption Total)]タイル	この設定は、ホームページに使用量の合計を表示するかどうかを決定します。
[使用トレンドの表示 (Show Consumption Trend)]タイル	この設定は、ホームページに使用トレンドのグラフを表示するどうかを決定します。

[アクションリクエストタイプ (Action Request Type)]では、次のコンピュータ処理に関連付けられたリクエストタイプを制御します。

表 4-8　アクションリクエストタイプ (Action Request Type) (詳細カスタマイズのみ)

項目	詳細
マシンを保護解除 (Unprotect machine)	カスタマイズしたリクエストタイプのリクエストタイプコード。デフォルトは DBREMBACK です。
VM のリストア (Restore VM)	カスタマイズしたリクエストタイプのリクエストタイプコード。デフォルトは DBRESTVM です。
ファイルのリストア (Restore File)	カスタマイズしたリクエストタイプのリクエストタイプコード。デフォルトは DBRESTFILE です。
ファイルリストアを登録する (Register for File Restore)	カスタマイズしたリクエストタイプのリクエストタイプコード。デフォルトは DBREGDNS です。
DB 保護の登録をする (DB Register for Protection)	カスタマイズしたリクエストタイプのリクエストタイプコード。デフォルトは DBREGPROT です。
DB SQL のリストア (DB Restore SQL)	カスタマイズしたリクエストタイプのリクエストタイプコード。デフォルトは DBRESTSQL です。
DB Oracle のリストア (DB Restore Oracle)	カスタマイズしたリクエストタイプのリクエストタイプコード。デフォルトは DBRESTORA です。

NetBackup Adapter のアクセス権は、すべてのユーザー、個々のテナント、または特定のユーザーがコンピュータに対して実行できる処理を制御します。

表 4-9　NetBackup Adapter アクセス権限

項目	詳細
今すぐバックアップを許可 (Allow Backup Now)	[今すぐバックアップ (Backup Now)]オプションを表示するかどうかを決めます。
マシンの保護を許可 (Allow Protect Machine)	[コンピュータを保護 (Protect Computer)]オプションを表示するかどうかを決めます。
ファイルのリストアを許可 (Allow Restore File)	[ファイルのリストア (Restore File)]オプションを表示するかどうかを決めます。このオプションでは[フォルダのリストア (Restore Folder)]オプションも設定できます。
VM のリストアを許可 (Allow Restore Vm)	[VM のリストア (Restore Vm)]オプションを表示するかどうかを決めます。

項目	詳細
マシンの保護解除を許可 (Allow Unprotect Machine)	[コンピュータを保護解除 (Unprotect Computer)]オプションを表示するかどうかを決めます。
使用状況レポートを許可 (Allow Usage Report)	ホームページに使用状況のレポートを表示するかどうかを制御します。
ファイルリストアの登録を許可 (Allow Register for File Restore)	[ファイルリストアを登録する (Register for File Restore)]オプションを表示するかどうかを決めます。
保護の登録を許可 (Allow Register for Protection)	[保護を登録する (Register for Protection)]オプションを表示するかどうかを決めます。
SQL のリストアを許可 (Allow Restore SQL)	バックアップが見つかった場合に[SQL データベースのリストア (Restore SQL Database)]オプションを表示するかどうかを決めます 。
Oracle のリストアを許可 (Allow Restore Oracle)	バックアップが見つかった場合に[Oracle バックアップをリストア (Restore Oracle Backups)]オプションを表示するかどうかを決めます 。

アクセス権について詳しくは、[テナントの構成 (Configuring Tenants)]セクションで参照できます。

p.31 の「テナントの構成」を参照してください。

[NetBackup Adapter の使用方法 (NetBackup Adapter Usage)]では、[使用方法 (Usage)]タブ内の機能を制御します。

表 4-10 NetBackup Adapter 使用方法

項目	詳細
料金タイプ (Charting Type)	料金計算の基準 (新しいバックアップ、使用容量、または基準を設定しない)。テナントレベルで管理が可能
転送済みデータの値の使用 (Use Data Transferred Values)	使用量の統計で[転送済みサイズ (Transferred Size)]または[イメージサイズ (Image Size)]のどちらを使用するかを制御します。[転送済みサイズ (Transferred Size)]の値は、アクセラレータを使用する場合などで低くすることができます。[転送済みサイズ (Transferred Size)]の値は、NetBackup 7.7.1 以降でのみ利用可能です。

5

Self Service のカスタマイズ

この章では以下の項目について説明しています。

言語設定

ポータルでは複数の言語がサポートされていますが、NetBackup Self Service ソリューションデータは現在、いくつかの言語のサブセットでのみ使用可能です。これらの言語には、簡体字中国語、日本語、フランス語、ドイツ語が含まれます。この設定には、日付形式を含む、言語および地域の設定が含まれます。

リクエストフォームの作成またはカスタマイズ

リクエストタイプはカスタマイズ可能ですが、通常の操作ではこのカスタマイズは不要です。標準装備になっているすべてのリクエストタイプは実装可能です。

メモ: 標準装備になっているリクエストフォームへの変更が必要な場合、まずそれをコピーしてから、そのコピーを必要に応じて編集できます。

NetBackup Self Service には、完全に事前構成されたリクエストフォーム (リクエストタイプ) が標準装備されています。これらのフォームは、バックアップオプションまたはリストアオプションがホームページダッシュボードから選択されると起動されます。追加のデータまたは統合が必要な場合、デフォルトのリクエストフォームをカスタマイズされたフォームへの関連付けで上書きできます。この上書きは、システム全体のレベルで有効になります。

カスタマイズはアップグレード時に上書きされる可能性があり、すべてのカスタマイズを再適用する必要があります。

標準装備されているリクエストフォームをリストから選択して、コピーする必要があります。フォームにアクセスするには、[管理 (Admin)]、[リクエストおよび承認 (Request and Approval)]、[リクエストタイプ (Request Type)]の順に選択します。次に、追加のリクエストフィールド、承認ステージまたはワークフローを追加すると、[リクエストタイプアクティブ (Request Type Active)]チェックボックスが有効になります。[リクエストタイプ名 (Request Type Name)]が[リクエストリスト (Request List)]での表示に適したテキストに修正されることを確認します。

メモ: 標準装備されているリクエストフィールドまたはワークフロー手順は削除しないでください。この機能は、フルフィルメント手順または承認プロセスの追加方法として使用可能です。

関連する[アクションリクエストタイプ (Action Request Type)]設定を[統合設定 (Integration Settings)]セクションから編集する必要があります。

1. [管理 (Admin)]、[設定 (Settings)]、[統合設定 (Integration Settings)]の順に選択して、設定にアクセスします。
2. 既存の値を新しい[リクエストタイプコード (Request Type Code)]と置き換え、編集します。
3. 次に、標準装備されているリクエストフォームを無効化できます。

メモ: サービスカタログ、標準装備されているリクエストタイプの完全リストは、デフォルト値へのリストアがリクエストされる場合に使用可能です。これらは、インストール場所の `MsBuild¥RequestTypes` フォルダにあります。

メモ: 交換用の[保護 (Protect)]と[今すぐバックアップ (Backup Now)]のフォームを有効にするには、それらを適切な[保護レベル (Protection Level)]にリンクします。このオプションは管理者ホームページのダッシュボードの[保護 (Protection)]タブにあります。

テーマ

事前に標準装備されている NetBackup Self Service テーマは調整可能です。テーマは管理領域画面で、使用される色、および多くのイメージとスタイルを編集して変更します。多くの要素が編集ページ別に編集可能です。[ページ幅 (Page Width)]は 1024 ピクセルのままにしておく必要があります。また、オンライン CSS エディタを使用して、追加のカスタマイズ編集を行うこともできます。

標準装備されているテーマをシステム幅に調整するには、[管理 (Admin)]>[設定]>[テーマ (Theme)]の順にを選択するか、個別のテナントの場合は[管理 (Admin)]>[組織]>[テナント]>[テーマ (Theme)]の順に選択します。

通知

ホームページの最上部にニュースティッカースタイルで新しい通知を表示できます。警告タイプまたは情報タイプの通知を表示できます。通知のテーマを変更したり、テナントを基準に通知をフィルタリングすることもできます。通知の公開は開始日と終了日の両方で制御できます。API はこれらの通知をサポートします。

[管理者 (Administrator)]のアクセスプロファイルを設定しているテナントでは、組織の通知を管理できます。

6

ユーザー認証方法

この章では以下の項目について説明しています。

ユーザー認証方法について

NetBackup Self Service では、次の 3 種類の方法でユーザーを認証できます。

- ユーザー名とパスワードを使用するフォームベース認証。この設定は、Self Service に用意されているデフォルトの設定です。
- Windows 認証 (任意で Active Directory をインポート)。このオプションは、企業で配備する場合にのみ適しています。
- WS-Federation パッシブプロトコルによるフェデレーションシングルサインオン。

フォームベース認証

Self Service ポータルには、ログオンページでユーザー ID とパスワードを入力してアクセスします。この設定は、システムにアクセスするデフォルトの方法です。他の設定は必要ありません。

パスワードのルールは[管理 (Admin)]、[設定 (Settings)]、[システム構成 (System Configuration)]の[パスワードポリシー (Password Policies)]カテゴリの順に選択して定義できます。

Windows 認証

Windows 認証を使用するには、ユーザーのドメイン名と合致するユーザー名を使用してデータベースでユーザーを設定する必要があります。形式は、*DOMAIN_NAME¥username* または *username* にします。形式は、システム設定によって異なります。

[管理 (Admin)]、[設定 (Settings)]、[システム構成 (System Configuration)]で[ドメイン名の削除 (Remove Domain Name)]を設定します。*firstname.lastname* を使用する場合はスイッチをオンにして、*DOMAIN¥firstname.lastname* を使用する場合はスイッチをオフにします。

Windows ユーザーが 1 人でも管理領域にアクセスすると、IIS で匿名認証とフォーム認証の両方が無効になります。Windows 認証を有効にします。IIS のこの設定により、`web.config` ファイルが更新されて Self Service のアドレスが更新に従って変更されます。

IIS で Windows 認証を設定するまでは、用意されている `admin` ユーザー ID を使用しないとシステムにアクセスできません。設定後は、手動ログオンは利用できません。

メモ: Active Directory を使用してユーザーを同期する場合は、初回インポート時に少なくとも 1 人のユーザーを `Supervisor` アクセスプロファイルに関連付けます。関連付けないと、管理領域に不正アクセスされます。

メモ: この操作はシステムの初回実装時の設定にのみ実行します。ログオンプロトコルに後で変更を加える場合には適していません。履歴データに影響を与えるからです。

Active Directory のインポート

Self Service と Active Directory を同期するとメンテナンスが簡単になります。インポートはスケジュール設定したインポートタスクで管理します。このプロセスで処理の時間や頻度を指定できます。ユーザーセットに含まれていないユーザーは Self Service で無効になっているので、スケジュールはすべてのユーザーセットに反映されます。

各プロファイルの異なるソースで複数のインポートプロファイルを作成できます。各プロファイルの Self Service のアクセスプロファイル、コストセンター、ユーザーアカウントの状態を指定する必要があります。ユーザーは 0 個以上のユーザーグループに自動的に割り当てられます。ただし、ユーザーグループがすでに Self Service に存在する必要があります。Self Service のユーザー名は、[氏名 (Full Name)] (デフォルト) または [表示名 (Display Name)]から取得できます。言語は選択できます。選択しない場合はシステムベースの言語を使用します。インポートプロファイルはグループまたは組織単位で指定できます。子を含めるかどうかも指定できます。

インポートプロファイルはリストの最上部から処理されるので、必要条件に合わせて順序を変更できます。複数のプロファイルに同一のユーザーが存在する場合は、処理する最新のプロファイルの[インポートユーザーフィールド (Imported User Fields)]のみが適用されます。すべてのプロファイルのユーザーグループメンバーシップが更新されます。

[Active Directory のインポート (Active Directory Import)]内で指定するユーザーは、ドメインのルートレベルで[内容の一覧表示 (List Contents)]と[すべてのプロパティの読み込み (Read All Properties)]の権限が必要です。これらの権利は、すべての組織単位や組織グループを検索してすべてのユーザーをインポートできるようにするために必要です。

インポートするときにユーザー ID の先頭にドメイン名を追加するかどうかをシステム構成設定で制御できます。[管理 (Admin)]、[設定 (Settings)]、[システム構成 (System Configuration)]の順に選択すると、システム構成設定を参照できます。1 つ目のユーザーアカウントを作成する前に、設定値が適切であることを確認してください。これ以降は、変更を加えると新しいユーザーアカウントが作成されて既存のアカウントは無効になり、履歴要求へのアクセスに影響を与えます。SAM アカウント名を変更すると、新しい Self Service のユーザーアカウントが作成されます。

Active Directory で管理していないレコードにローカルで管理している Self Service ユーザーを作成できます。Active Directory の更新では、これらのユーザーは無視されます。

メモ: Windows 認証を使用する場合は、初回インポート時に少なくとも 1 人のユーザーを `Supervisor` アクセスプロファイルに関連付けます。関連付けないと、管理領域に不正アクセスされます。

メモ: この操作は、システムの初回実装時の設定でのみ実行します。この操作は、ユーザー管理方法に影響を与えるので、後でログオンプロトコルに変更を加える場合は適しません。

フェデレーションシングルサインオンを使用するための Self Service の設定

Self Service では、WS-Federation パッシブプロトコルによるフェデレーションシングルサインオンをサポートします。Microsoft WIF (Windows Identity Foundation) とともに実装し、クレームの転送時に SAML (Security Assertion Markup Language) トークンを使用します。ただし、SAML2 プロトコル (SAML-P) はサポート外です。

Self Service をインストールするときに、最初のログオンで admin アカウントを使用する必要があるフォーム認証で設定します。

ID プロバイダを使用して認証するには:

1. Self Service のデータベースで、ID プロバイダのユーザーに対応するユーザーを作成します。
2. Self Service の `web.config` ファイルを編集してフェデレーションシングルサインオンを有効にします。

Self Service でのユーザーの作成

Self Service でユーザーを識別するには[ユーザー ID (User ID)] を使用します。ID プロバイダでユーザーを識別するには[クレーム (Claims)]を使用します。正常に認証するには、Self Service のユーザーが ID プロバイダのいずれかのクレーム値に一致するユーザー ID を所有している必要があります。

Self Service ユーザーを見つけるときに、Self Service は[名前 (Name)]、[電子メール (Email)]、[Windows アカウント名 (Windows Account Name)]、[UPN]を調べます。通常、[名前 (Name)]と[Windows アカウント名 (Windows Account Name)]では `domain¥username` の形式を使用し、[電子メール (Email)]と[UPN]では `username@domain` の形式を使用します。

ポータルでユーザーを入力することも、Active Directory から直接まとめてインポートしたり `.CSV` ファイルを使用してインポートすることもできます。

web.config を編集してフェデレーションシングルサインオンを有効にする

`web.config` ファイルを変更してフェデレーションシングルサインオンを有効にするには:

1. *`install_path`*`¥WebSite` にアクセスします。
2. 管理者としてメモ帳で `web.config` を開きます。
3. `<modules>` セクションを検索して 2 つの `IdentityModel` モジュールをコメント解除します。
4. `<authentication>` セクションを検索してモードを `None` に変更します。
5. `<wsFederation>` 要素の issuer 属性に WS-Federation Web サイトの URL を入力します。
6. `<trustedIssuers>` セクションを検索して WS-Federation サーバーのトークン署名証明書の拇印を入力します。

メモ: ファイルに隠し文字を挿入すると拇印の照合に影響を与える可能性があるので、拇印のカットアンドペーストは使用しないでください。

---

7 自己署名 SSL 証明書を使用するテストシステムでこれらの変更を加える場合は、<certificateValidation> 要素をコメント解除します。

8 web.config ファイルを保存します。

[フォーム認証 (Forms Authentication)]に切り替える必要がある場合は、web.config ファイルを編集して認証モードをフォーム <authentication mode="Forms"> に設定できます。[フォーム認証 (Forms Authentication)]に切り替えると問題が解決することがあります。

Self Serviceへのログオン

フェデレーションログオン用にシステムを完全に構成していることを確認するには:

1 Internet Explorer を閉じて再び開きます。

2 Self Service の URL を入力します。

3 使用している環境でテスト証明書を使う場合は証明書エラーを 2 回容認します。

4 以前作成したユーザーの資格情報を入力します。ログオンに成功するはずです。

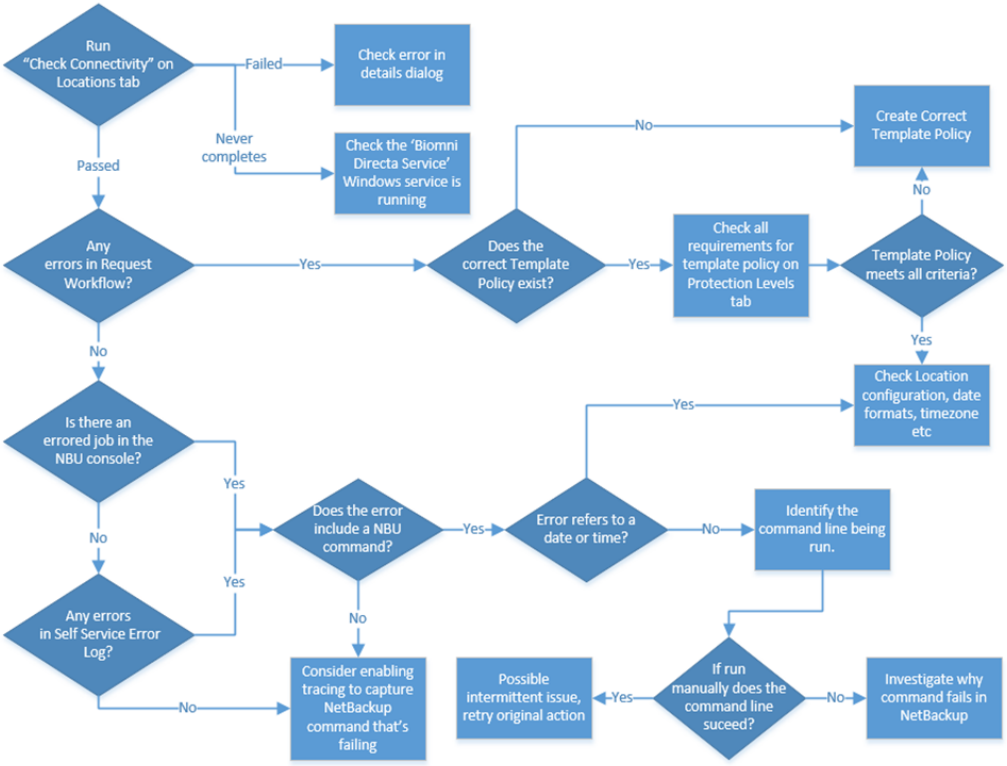
7

トラブルシューティング

この章では以下の項目について説明しています。

トラブルシューティングについて

問題のトラブルシューティングの最初のステップとして、その問題が Self Service または NetBackup 自体に関するものかどうかを判断します。方向性が明確なエラーまたは障害メッセージがない限り、最善の初回のアクションは、NetBackup コンソールでアクションを手動で実行してみることです。このアクションが失敗した場合、NetBackup に問題があることを示します。NetBackup に問題が認められない場合は、続けて Self Service を診断します。



トラブルシューティング情報の参照場所

接続性をチェックする

[バックアップサーバー (Backup Servers)]タブの[接続の確認 (Check Connectivity)]アイコンを使用して、システム内の各マスターサーバーへの接続をテストします。エラーには赤いバツ印が表示され、これをクリックするとエラー情報が表示されます。

リクエストワークフロー

Self Service の一部のアクションにより、システム内でリクエストが作成されます。一番上のメニューにある[リクエスト (Requests)]アイコンから、トラブルシューティングの良い情報源となる可能性があるリクエストを見つけることができます。

表 7-1 リクエストの概略情報

マイルストーン名	詳細
フルフィルメントマイルストーン	失敗したステップは赤で、それらに対するエラーが含まれます。
リクエストマイルストーン (監査)	アクションに対する進捗状況を表示し、NetBackup ジョブ ID を提供することもできます。

Self Service エラーログ

[管理 (Admin)]、[サポート (Support)]、[エラーログ (Error Log)]の順に移動して見つけます。

エラーにはシステム参照が含まれている可能性があります。これを使用して特定のリクエスト、次にアクションに結び付けることができます。

失敗した NetBackup コマンドを見つける場合、テキスト `/bin` または `¥bin` の検索を実行すると便利です。

追加のアクティビティレポート

アクティビティレポートの追加のソースは、[管理 (Admin)]ホームページの[サポート]カテゴリにあります。このカテゴリには、統合ログ、監査ログ、電子メールログ、およびタスクキュー、電子メールキューへのアクセスが含まれます。[タスクキュー]は、特に有用な情報源です。さまざまなタブにはさまざまな状態の [タスクキュー]アクティビティが表示されます。[履歴]タブをフィルタし、[エラーで完了 (Completed With Errors)]の状態のタスクを表示できます。エラーのあるタスクは赤で強調表示されます。

NetBackup コマンドラインエラー

Self Service は、マスターサーバーのコマンドラインで NetBackup コマンドを実行することにより動作します。コマンド実行の問題は、Self Service のエラーに含まれます。これらのエラーを見つけることは、非常に有用です。NetBackup コマンドラインのエラーがある場合、コマンドをコピーし、それをマスターサーバーで手動で実行してください。この方法はトラブルシューティングに役立ちます。

NetBackup コンソールでエラーが発生したジョブ

特定されるジョブ ID に対して特に NetBackup アクティビティモニターでエラーをチェックします。

テンプレートポリシーのチェック

テンプレートポリシーを正しく機能するように特定の方法で構成する必要があります。ポリシーテンプレートをチェックする際は、[管理 (Admin)]の[保護レベル]タブを参照してください。テンプレートが保護レベルと対応する緑色のチェックマークを選択すると表示されるすべての条件を満たしていることを確認します。

問題のコンピュータ

[コンピュータ (Computers)]タブのアンバーか赤色の歯車は、問題のコンピュータを強調表示しています。

- 赤色の歯車は、同期か活動失敗のエラーが以前に発生したことを示します。
- アンバーの歯車は、同期か活動失敗のエラーが以前に発生したが、その活動が現在進行中であることを示します。

コンピュータ詳細のポップアップから、最後のエラーとスタックトレースを提供する[完全な詳細]タブを選択します。

同期エラー

MSP 管理ユーザーとしてコンピュータ詳細ポップアップに表示できます。

コンピュータに関する正しくない詳細

イメージまたは保護の詳細がコンピュータに対し正しいと思われない場合、コンピュータに[NetBackup データの更新 (Refresh NetBackup Data)]を実行します。

追跡

追跡は、より詳細なレベルで問題を分析するように構成できます。この方法は、より高度なトラブルシューティング方法です。この方法はサポートなしで行わないでください。 *Services Site*¥Logs および *Panels Site*¥Logs の ReadMe.txt を参照してください。

テナントユーザーの偽装

テナントユーザーを偽装して、テナントユーザーのホームページビューを表示したり、テナントユーザーのためにアクションを実行したりできます。

ホームページから、ログオンしたユーザー名にマウスを置くと、オプション[別のユーザーとして実行 (Act as another user)] が表示されます。このオプションを選択すると、ユーザーリストが表示されます。必要なテナントユーザーを選択すると、ホームページビューが表示されます。

リモート PowerShell から Windows マスターサーバーまでの問題

同時リモート PowerShell 接続制限

NetBackup マスターサーバーでは、リモート接続数が制限されています。サーバーのデフォルトは通常十分です。

使用量が大きなインストールでは、この制限を増やす必要がある場合があります。制限を超えると、次のエラーが発生する可能性があります。

```
NetBackup server name Connecting to remote server NetBackup server
name failed with the following error message : The WS-Management
service cannot process the request. The maximum number of concurrent

shells for this user has been exceeded. Close existing shells or
raise the quota for this user. For more information, see the
about_Remote_Troubleshooting Help topic.
```

制限を増やすには:

1. NetBackup マスターサーバーで、許可される接続数を決定するために表示される次の PowerShell コマンドを実行します。

   ```
   Get-Item WSMan:¥localhost¥Shell¥MaxShellsPerUser
   ```

2. NetBackup マスターサーバーで、許可される接続数を増やすために表示される次の PowerShell コマンドを実行します。

   ```
   Set-Item WSMan:¥localhost¥Shell¥MaxShellsPerUser interger_value
   ```

同時ユーザー操作の制限

この制限に達すると、次のようなエラーが表示されます。

```
RunCommand failed.
"C:¥Program Files¥Veritas¥NetBackup¥bin¥admincmd¥bpimagelist"
"-d" "03/02/2015 09:58:11" "-e" "03/02/2015 11:58:11"
"-json_compact"
Run-Process script threw exception:
Starting a command on the remote server failed with the following
error message : The WS- Management service cannot process the
request. This user is allowed a maximum number of 15 concurrent
operations, which has been exceeded. Close existing operations for
this user, or raise the quota for this user. For more information,
see the about_Remote_Troubleshooting Help topic.
```

Windows 2012 でのデフォルトは 1500、Windows 2008 R2 でのデフォルトは15 です。マスターサーバーで、この制限を増やすために表示される次のコマンドを実行します。

```
winrm set winrm/config/Service
@{MaxConcurrentOperationsPerUser="1500"}
```

PowerShell 接続プール

デフォルトで、Windows 場所では PowerShell 接続プールが使用されます。このオプションにより、マスターサーバーで PowerShell を呼び出したときのより高いスループット

が可能になります。すべての呼び出しでコンピュータでの新しい実行領域の作成および破棄が要求されないため、高いスループットが実現されます。

設定

表 7-2 PowerShell 接続プールに使用されるバックアップサーバーフィールド

名前	詳細
NetBackup 使用プール接続	PowerShell 接続プールを有効にするかどうかを決定します。パフォーマンスを向上させるために、接続プールはデフォルトで有効になっています。この値は、サポートから指示された場合にのみ変更します。
NetBackup 最小プールサイズ (NetBackup Minimum Pool Size)	PowerShell 接続プールの最小接続数。値が空の場合、デフォルトの 1 になります。この値は、サポートから指示された場合にのみ変更します。
NetBackup 最大プールサイズ (NetBackup Maximum Pool Size)	PowerShell 接続プールの最大接続数。値が空の場合、デフォルトの 3 になります。この値は、サポートから指示された場合にのみ変更します。

診断

診断追跡では、PowerShell 接続の作成、使用、廃棄に関する多くの情報が取得されます。

次の PowerShell スクリプトを使用して、マスターサーバーへの接続に関する情報を検索できます。

```
$machineName = 'master_server_machine_name'
$userName = 'user_name_-_same_as_the_location_integration_setting'
$password = '<password>'

$connectionURI = ('http://{0}:5985/wsman' -f $machineName)

$securePassword = ConvertTo-SecureString $password -AsPlainText -Force
$credential = New-Object System.Management.Automation.PSCredential
($userName, $securePassword)

$connections = Get-WSManInstance -ConnectionURI $connectionURI
-Credential $credential -ResourceURI shell -Enumerate #| where
{ $_.Owner -eq $userName }
```

```
if($connections.length -eq 0) { "There are no remote PowerShell
connections" }

$connections | ForEach-Object {
    # To remove the connection, uncomment the line below
    # Remove-WSManInstance -ConnectionURI $connectionURI shell
      @{ShellID=$_.ShellID}

    $_
    "Owner: {0}" -f $_.Owner
    "HostName: {0}" -f (Resolve-DnsName $_.ClientIP | select
    -expand NameHost)
    "-------------------------------------------------------"
}
```

スケジュールされているタスクの監視

Self Service では、スケジュールされているタスクの多くがバックグラウンドで実行されます。これらのスケジュールされているタスクにより外部システム間のデータが同期され、ユーザーインターフェースが可能な限り最新のものに保たれます。これらのタスクのステータスおよびタイミングは、非テナント管理者ユーザーとしてログオンするとホームページの［監視 (Monitoring)］タブに表示されます。

特定のタスクの実行に問題がある場合、アクションの歯車は赤です。タスク名をクリックすると、［スケジュールされているタスクの詳細 (Scheduled Task Details)］ウィンドウが表示されます。このウィンドウにはエラーメッセージが表示され、トラブルシューティングプロセスに役立ちます。エラーを解決し、ドロップダウンの［今すぐ実行 (Run Now)］をクリックして、タスクを再試行できます。

［監視 (Monitoring)］タブの［アクティビティ］領域に、アクションに対しキューに登録されたタスクが表示されます。このキューが 10 項目を超え、数分間にわたり変わる兆候がない場合、Self Service のメインタスクエンジンに問題がある可能性があります。Windows サービスが実行中であることを確認し、［管理 (Admin)］、［サポート (Support)］、［エラーログ (Error Log)］の順に選択して、エラーを確認します。この画面から、使用率データの再構築を開始できます。この処理により、今月のデータと以前の月のデータの両方が更新されます。

表 7-3　　バックグラウンドタスクと説明

バックグラウンドタスク	説明
System Sync	前回実行以来の全ての Master Server からのバックアップ イメージをインポートします。古いバックアップ イメージの有効期限を期限切れにして使用量を計算します。このタスクはスケジュールで 1 日に一度実行されます。

バックグラウンドタスク	説明
System Update	バックアップイメージの同期やアクティブなリクエストの更新など、システム更新を実行します。このタスクはスケジュールで 1 分に一度実行されます。
VCloud Director Import	構成されているインポートに従って、vCloud Director からのコンピュータを同期します。このタスクはスケジュールで 1 日に一度実行されますが、手動で開始できます。

A

NetBackup ポリシータイプ

この付録では以下の項目について説明しています。

NetBackup ポリシー形式のリスト

表 A-1 は、NetBackup で使用可能なポリシー形式と、関連付けられている ID のリストです。これらをポリシー形式の統合設定の作成時に使用する必要があります。

表 A-1 ポリシー形式および関連付けられている ID

ID	名前	NetBackup Self Service	バックアップ対象
0	標準	保護; ファイルのリストア	ポリシーテンプレートで定義。ポリシーのすべてのクライアントに適用。
4	Oracle	保護 (クライアントベースのみ); データベースのリストア	クライアントに存在するスクリプトによって定義。
6	Informix-On-BAR	サポートされない	
7	Sybase	保護	クライアントに存在するスクリプトによって定義。
8	MS-SharePoint	保護	ポリシーテンプレートで定義。ポリシーのすべてのクライアントに適用。
10	NetWare	サポートされない	
11	DataTools-SQL-BackTrack	サポートされない	
12	Auspex-FastBackup	サポートされない	

ID	名前	NetBackup Self Service	バックアップ対象
13	MS-Windows	保護; ファイルのリストア	ポリシーテンプレートで定義。すべてのクライアントに適用。
14	OS/2	サポートされない	
15	MS-SQL-Server	保護 (クライアントベースのみ); データベースのリストア	クライアントに存在するスクリプトによって定義。
16	MS-Exchange-Server	保護	ポリシーテンプレートで定義。ポリシーのすべてのクライアントに適用。
17	SAP	保護	クライアントに存在するスクリプトによって定義。
18	DB2	保護	クライアントに存在するスクリプトによって定義。
19	NDMP	保護	ポリシーテンプレートで定義。ポリシーのすべてのクライアントに適用。
20	Flashbackup	保護	ポリシーテンプレートで定義。ポリシーのすべてのクライアントに適用。
21	Split-Mirror	サポートされない	
22	AFS	サポートされない	
24	DataStore	サポートされない	
25	Lotus-Notes	サポートされない	
27	OpenVMS	サポートされない	
29	FlashBackup-Windows	保護	ポリシーテンプレートで定義。ポリシーのすべてのクライアントに適用。
31	BE-MS-SQL-Server	サポートされない	
32	BE-MS-Exchange-Server	サポートされない	
34	ディスクステージング	サポートされない	
35	NBU_Catalog	サポートされない	
37	CMS_DB	サポートされない	
38	PureDisk Export	サポートされない	
39	Enterprise Vault	サポートされない	

ID	名前	NetBackup Self Service	バックアップ対象
40	VMware	保護 (インテリジェントポリシー); VM のリストア; ファイルのリストア	
41	Hyper-V	保護 (クライアントベース); VM のリストア; ファイルのリストア	
42	NBU-Search	サポートされない	

現時点では、コンピュータをスナップショット対応ポリシーで保護できません。この問題は既知の問題です。

B

ダッシュボードの信号機のステータスおよび使用状況

この付録では以下の項目について説明しています。

ダッシュボードの信号機のステータスと使用方法について

ダッシュボードのステータスを示すセクションには、既定の保護状態 (赤色、アンバー、緑色) のコンピュータ数が表示されます。この色の算出は、保護形式を設定しているコンピュータによって異なります。

使用容量は、月別の合計量として表示されます。

テナントユーザーには、テナントの合計が表示されます。サービスプロバイダには、全資産を反映する合計が表示されます。

保護タイプを設定したコンピュータ

ユーザーが保護タイプに設定可能な管理対象の保護レベルを選択すると、1 つ以上の NetBackup ポリシーにコンピュータが追加されます。Self Service で各ポリシーを認識するしきい値 (時間単位) が保持されます。コンピュータを追加した既知のポリシーすべてのしきい値を評価して、赤色、アンバー、緑色のどの状態であるかを判断します。管理対象外の保護レベルを含む保護タイプのあるコンピュータは、赤色または緑色の信号機

で評価されます。信号機の色は、管理対象外の保護レベルのポリシー名に一致するバックアップの存在に依存します。

表 B-1　　保護タイプを設定したコンピュータ

色 (Color)	コンピュータの状態
緑色 (Green)	保護レベルは適用されています。すべてのポリシーはしきい値内のバックアップです。
アンバー (Amber)	コンピュータに保護レベルは適用されていません。
赤色 (Red)	保護レベルは適用されていますが、1 つ以上のポリシーにバックアップが存在しないか、または最新のバックアップがしきい値外です。

メモ: NetBackup ポリシーにコンピュータを指定していても保護レベルがわからない場合は、色の状態を判断するときにポリシーは考慮されません。

[今すぐバックアップ (Backup Now)]プロセスでのみ保護されているコンピュータの数は数えられず、保護済みであるとは表示されません。

保護形式が設定されていないコンピュータ

コンピュータに保護形式を設定していない場合、状態は常に琥珀色で表示されます。

使用量と料金

[使用量 (Usage)]セクションは、使用容量の合計と月別グラフの 2 つの部分に分かれています。

使用容量は、テナントに属する有効期限内のすべてのイメージから計算されます。使用容量は、GB 単位の絶対値またはテナントの領域を減算した容量に関する絶対値として示されます。減算した領域に関する使用容量を表示すると、合計量に対する割合 (%) と絶対量の両方の値が示されます。使用容量の計算は、[転送済みデータの値の使用 (Use Data Transferred Values)]の統合設定に依存します。

料金設定

料金データは、テナントごと、保護レベルごと、またはその両方で設定できます。

[使用量 (Usage)]でバックアップの価格を計算する場合、次のルールが適用されます。

1. テナントに請求金額があり、このバックアップの保護レベルにも請求金額がある場合、その請求金額が使用される。それ以外の場合:

2. テナントにデフォルトの請求金額がある場合、このデフォルトの金額が使用される。それ以外の場合:
3. バックアップに対し、システム全体の保護レベルの請求金額がある場合、それが使用される。それ以外の場合:
4. デフォルトのシステム請求金額が使用される。

デフォルトでは、NetBackup Self Service には単一のシステム全体の請求金額として 0 米国ドルが設定されています。

テナントが保護レベルの請求金額を要求する場合は、テナント全体のコストを提供する必要があります。

料金を追加または編集するには、MSP または管理者アカウントでログインし、[請求金額 (Charge Rates)]タブをクリックする必要があります。[追加 (Add)]または[編集 (Edit)]をクリックすると、システムまたはテナント全体の請求金額を設定したり、個別の保護レベルを適切な料金で上書きできます。

メモ: NetBackup Self Service 内にコンピュータのバックアップが作成されている場合、そのコンピュータに関連付けられた使用量レコードがあります。

メモ: NetBackup Self Service を認識する NetBackup ポリシーのバックアップのみが使用量に加算されます。

メモ: [テナントの使用量 (Tenant Usage)]のデータを表示したときに報告される[CostPerGb]の図は、テナントの値を示します。システムで保護レベルの上書きを使用するように設定した場合、この[CostPerGb]は正しくありません。ただし、実際のコストは、保護レベルのコストを使用して計算されます。テナントの使用量の詳細には、そのテナントの保護レベルのデータを使用する必要があります。

C

NetBackup からのデータの同期

この付録では以下の項目について説明しています。

NetBackup からのデータの同期について

データを NetBackup から Self Service に同期する場合、2 つの異なるプロセスが必要です。プロセスを以下に示します。

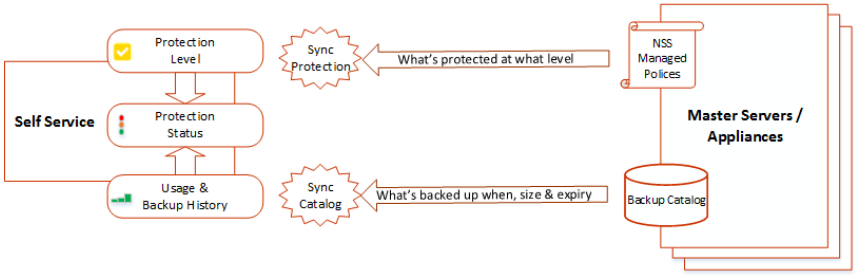


表 C-1 同期プロセスと関連詳細

同期プロセス	詳細
同期保護	■ 保護レベルが構成されている場合にのみ同期。たとえば、ポリシーを管理する Self Service です。 ■ NetBackup 上のポリシーでクライアントコンピュータを検索します。 ■ コンピュータまたはコンテナに対し保護レベルを表示します(色が付いたチェックマークのアイコン)。 ■ Self Service では、保護要求の追加および削除により、ローカルキャッシュが最新の状態に保たれます。 ■ [管理]パネルで手動で起動可能です。
同期カタログ	■ バックアップカタログを同期し、すべてのアクティブなイメージの詳細を Self Service に転送します。 ■ 構成可能なバッチサイズで実行される初期インストール後完全同期。 ■ 通常のタスクでは、日次増分同期によって Self Service でレコードが最新の状態に保たれます。 ■ イメージレコードは、Self Service インベントリのコンピュータと一致します。 ■ Self Service では、概略のダッシュボードに対し夜間ベースでコンピュータおよびテナントごとにイメージサイズデータがロールアップされます。 ■ 個別のコンピュータのイメージは、今すぐバックアップリクエスト完了時、または管理者が管理パネルで手動で初期化するときに再同期されます。

D

NetBackup Self Service データキャッシュプロセス

この付録では以下の項目について説明しています。

NetBackup Self Serviceのデータキャッシュ処理

NetBackup Adapter は、コンピュータ、保護、バックアップイメージに関するデータをキャッシュするのでパフォーマンスが向上します。

スケジュール設定したタスクを定期的に実行してデータを最新の状態に保ちます。スケジュール設定するタスクを次に示します。

- システムの同期 (System Sync)
  - 前回の実行以降に作成されたバックアップイメージをすべてのマスターサーバーからインポートする
  - 古いバックアップイメージを期限切れにする
  - 使用量を計算する
  - 信号機の状態を計算する
  - デフォルトで、毎日午前 12 時 15 分 (UTC) に実行する
- システム更新 (System Update)

このタスクでは、NetBackup データの同期するようにフラグを付けたコンピュータを処理します。保護レベルとバックアップイメージをインポートして、信号機の状態を再計算します。デフォルトでは、毎分実行します。

- vCloud Director のインポート (vCloud Director Import)
  構成されているインポートに従って、vCloud Director からのコンピュータを同期します。このタスクは、デフォルトでは毎日午前 12 時 30 分 (UTC) に 1 回実行しますが、手動で開始することもできます。

システムの同期

- すべてのオンラインのバックアップサーバーから過去 1 日間のイメージをインポートします。前回のシステム同期時に開始したものの完了しなかったバックアップを取得するために、24 時間分重複してインポートします。
- 期限切れのイメージにフラグを付けます。
- 前回のバックアップを更新して信号機の状態を計算します。

メモ: 新しいバックアップサーバーを追加すると、システムで処理が個別にトリガされません。バックアップイメージの取得やポリシーのインポートのような新しい同期または進行中の同期にこの新しいバックアップサーバーの追加が導入されました。古いイメージは手動でしかインポートできません。[NetBackup データの更新 (Refresh NetBackup Data)] をクリックするか、または API を呼び出して古いイメージをインポートします。バックアップを設定しているすべてのコンピュータでこの処理が必要です。

統合設定

一覧表示されている統合設定は次のシステム同期に関係があります。

- 使用状況の保持期間 (月単位) (NetBackup Adapter 統合セクション)
  グラフに使用状況データと期限切れのバックアップイメージを保持する期間と月数が表示されます。この期間が終了すると、使用状況データと期限切れのイメージはシステムの同期で削除されます。

NetBackup データの同期

コンピュータをインポートするときに、[NetBackup データの更新 (Refresh NetBackup Data)] をクリックするか、または API で `SyncNetBackupData` を呼び出してコンピュータに同期のフラグを付けます。この操作はコンピュータの同期が可能であるとマーク付けするので、システム更新でこのコンピュータが選択されます。この処理は保護とイメージをインポートし、信号機の状態を再計算します。

タスクでは、5 分間に 100 台のコンピュータをまとめて処理するか (デフォルト)、またはインポートが必要なコンピュータが存在しなくなるまで処理します。最も前に追加したコンピュータを最初に処理します。最初はすべてのコンピュータが同じ優先度ですが、[今す

ぐバックアップ (Backup Now)]を実行すると、これを実行したコンピュータは高優先度にマーク付けされます。

同期に失敗すると、同期は一定期間ロックされます。ロックされても、エラーがない他のコンピュータは処理できます。

統合設定

一覧表示される統合設定は次の NetBackup データの同期に関係があります。

- イメージのインポートのバッチ処理 (分単位) (NetBackup Adapter 統合セクション)
  同期のマークが付いたコンピュータがある場合はシステム更新で一定期間データを取得します。デフォルトでは 5 分に設定されています。
- イメージのインポートのロック待機 (分単位) (NetBackup Adapter 統合セクション)
  この値は、イメージの取得に失敗した場合にコンピュータのイメージの同期をロックする期間を定義します。デフォルトでは 60 分に設定されています。

今すぐバックアップ

[今すぐバックアップ (Backup Now)]リクエストが完了すると、コンピュータに高優先度の同期であることを示すフラグが付くので、コンピュータは可能な限り早く新しいイメージを同期します。

コンピュータの保護

[コンピュータを保護 (Protect Computer)]リクエストが完了すると、タスクをキューに入れて保護レベルをデータベースに追加し、信号機の状態を更新します。

コンピュータを保護解除

[コンピュータを保護解除 (Unprotect Computer)]リクエストが完了すると、タスクをキューに入れてデータベースから保護レベルを削除し、信号機の状態を更新します。

E

統合設定

この付録では以下の項目について説明しています。

統合設定について

統合設定は、値を含む名前付き設定のフレキシブルなストアです。これらは、NetBackup Self Service と NetBackup の間の統合を構成するために使用されます。個別の設定はセクション内でグループ化され、[管理 (Admin)]、[設定]、[統合設定]の順にアクセスします。このセクションには、NetBackup Self Service ソリューションに関連する統合設定の完全リストが含まれます。個別のセクションまたは設定は、マニュアル全体の該当する機能領域で参照されます。

一部の設定では[テナントの上書きを許可 (Allow Tenant Override)]が[はい]に設定されています。これらの構成は通常テナントベースごとに構成する必要があり、上位レベルの統合設定では正常に完了されません。代わりに、特定のテナントに関する詳細下で構成されます。NetBackup Adapter アクセス権限設定にもユーザー上書きのオプション ([システム全体 (System wide)]>[テナント]>[ユーザー]) があります。アクセス権限に関する詳細を参照できます。

p.33 の「アクセス権」を参照してください。

上書き設定がシステム全体の統合設定に対して自動的に作成された値から手動で変更される場合、その新しい値は無視されます。

テナントレベル統合設定のほとんどはホームページから作成されますが、[管理 (Admin)] >[組織]>[テナント]の各テナントレコードの別個のタブでも編集されます。テナント内からアクセスすると、テナントレベルで編集可能な設定のみが使用可能です。

事前に標準装備されている統合設定セクションは次のとおりです。

表 E-1　　統合設定の事前設定

設定	詳細
NetBackup Adapter	このセクションでは、ソリューション全体に影響する設定が保持されます。次のセクションのうち 1 つのみがある必要があります。
NetBackup Adapter 使用方法	このセクションでは、ホームページの[使用量 (Usage)]パネルのデータと計算が管理されます。 次のセクションのうち 1 つのみがある必要があります。
NetBackup Adapter アクセス権限	このセクションでは、ソリューションで許可されるバックアップおよびリストアのアクションが決定されます。次のセクションのうち 1 つのみがある必要があります。
アクションリクエストタイプ	このセクションでは、特定の送信済みリクエストタイプの上書きがサポートされます。次のセクションのうち 1 つのみがある必要があります。

[vCloud Director インポートを追加 (Add vCloud Director Import)]フォームを完了すると生成される統合設定セクションは、次のとおりです。

表 E-2　　生成される統合設定

設定	詳細
vCloud インポート *import*	このタイプのセクションには、vCloud Director インスタンスの詳細が含まれています。コンピュータはここからインポートされ、このセクションではインポートされたコンピュータと関連付けられている Self Service バックアップサーバーが決定されます。個別のテナント資格情報は、テナントに対して指定されます。複数の vCloud Director インポートセクションを指定できます。詳細情報が利用可能です。 p.35 の「コンピュータの登録」を参照してください。

NetBackup Adapter

このセクションでは、ソリューション全体に影響する設定が保持されます。次のセクションのうち 1 つのみがある必要があります。

表 **E-3** NetBackup Adapter 設定

設定	テナント上書き	詳細
Report Customer Root	はい	このテナントのレポートが保存される Web サーバー上のフォルダのパス。
レポートファイル拡張子	いいえ	拡張子のセミコロン区切りリストを指定できます。
契約領域 (TB)	はい	使用に合意された領域の合計量 (TB)。 オプションの値; 設定されると、テナントレベルで通常構成
使用状況保持期間 (月)	いいえ	履歴ロールアップデータがホームページ使用状況グラフおよび表に表示するために保持される月数。
パネル URL	いいえ	NetBackup Adapter パネルの URL。この値は最初にインストーラによって設定されます。
サービス URL	いいえ	NetBackup Adapter Web サービスの URL。この値は最初にインストーラによって設定されます。
イメージインポートバッチ処理 (分)	いいえ	コンピュータイメージロードでは、コンピュータが同期にマークされている間の期間のイメージが取得されます。この値のデフォルトは 5 分です。
イメージインポートロック遅延 (分)	いいえ	この設定により、イメージ取得時にエラーが発生した場合にコンピュータに対してコンピュータ同期をロックする期間が決定されます。デフォルトは 60 分です。
使用状況電子メールの送信	いいえ	システム使用状況を詳細に記載する電子メールが各月の 1 日に送信されます。この電子メールの送信を希望しない場合、[いいえ]に設定します。
[信号機表示 (Show Traffic Lights)]タイル	はい	この設定は、ホームページに信号機を表示するかどうかを決定します。
[合計使用量の表示 (Show Consumption Total)]タイル	はい	この設定は、ホームページに使用量の合計を表示するかどうかを決定します。
[使用トレンドの表示 (Show Consumption Trend)]タイル	はい	この設定は、ホームページに使用トレンドのグラフを表示するどうかを決定します。

NetBackup Adapter 使用方法

このセクションでは、ホームページの[使用量 (Usage)]パネルのデータと計算が管理されます。次のセクションのうち 1 つのみがある必要があります。

表 E-4　　アダプタの使用状況の設定

設定名	テナント上書き	詳細
料金タイプ	はい	料金が新しいバックアップまたは使用領域を表すのかどうか、または計算が行われないかどうかに関する基本パラメータ。 オプション: 新規バックアップ、使用容量、またはなし。
転送済みデータの値の使用	いいえ	使用量の統計で[転送済みサイズ (Transferred Size)]または[イメージサイズ (Image Size)]のどちらを使用するかを制御します。[転送済みサイズ (Transferred Size)]の値は、アクセラレータを使用する場合などで低くすることができます。[転送済みサイズ (Transferred Size)]の値は、NetBackup 7.7.1 以降でのみ利用可能です。

NetBackup Adapter アクセス権限

リストされているコンピュータに対しホームページから使用可能なアクションを決定します。アクションはシステム全体で、特定のテナント用、または個別のテナントユーザー用です。アクションは次のとおりです。

- 今すぐバックアップ
- マシンを保護
- ファイルのリストア (Restore File)
- VM のリストア
- マシンを保護解除 (Unprotect machine)
- ファイルリストアを登録する (Register for File Restore)
- 保護の登録をする
- SQL のリストア
- Oracle のリストア

このセクションでは、ホームページ[使用状況グラフ (Usage graph)]および[使用状況リスト (Usage list)]の管理も可能です。

次のセクションのうち 1 つのみがある必要があります。

表 **E-5** NetBackup Adapter アクセス権限

設定名	テナント上書き	詳細
今すぐバックアップを許可 (Allow Backup Now)	はい	この値をユーザーレベルで上書きするには、ドロップダウンから [for user] を選択します。この表の後の「注意」を参照してください。
マシンの保護を許可 (Allow Protect Machine)	はい	この値をユーザーレベルで上書きするには、ドロップダウンから [for user] を選択します。この表の後の「注意」を参照してください。
ファイルのリストアを許可 (Allow Restore File)	はい	この値をユーザーレベルで上書きするには、ドロップダウンから [for user] を選択します。この表の後の「注意」を参照してください。
VM のリストアを許可 (Allow Restore Vm)	はい	この値をユーザーレベルで上書きするには、ドロップダウンから [for user] を選択します。この表の後の「注意」を参照してください。
マシンの保護解除を許可 (Allow Unprotect Machine)	はい	この値をユーザーレベルで上書きするには、ドロップダウンから [for user] を選択します。この表の後の「注意」を参照してください。
使用状況レポートを許可 (Allow Usage Report)	はい	この値をユーザーレベルで上書きするには、ドロップダウンから [for user] を選択します。この表の後の「注意」を参照してください。
ファイルリストアの登録を許可 (Allow Register for File Restore)	はい	この値をユーザーレベルで上書きするには、ドロップダウンから [for user] を選択します。この表の後の「注意」を参照してください。
保護の登録を許可 (Allow Register for Protection)	はい	この値をユーザーレベルで上書きするには、ドロップダウンから [for user] を選択します。この表の後の「注意」を参照してください。
SQL のリストアを許可 (Allow Restore SQL)	はい	この値をユーザーレベルで上書きするには、ドロップダウンから [for user] を選択します。この表の後の「注意」を参照してください。
Oracle のリストアを許可 (Allow Restore Oracle)	はい	この値をユーザーレベルで上書きするには、ドロップダウンから [for user] を選択します。この表の後の「注意」を参照してください。

メモ: システム全体またはテナントレベルフラグのみを設定することをお勧めします。テナントユーザーレベルでの上書きは、システム全体設定が[有効]に設定されている場合にのみ考慮されます。

テナントの構成についての詳しい情報を参照できます。

p.31 の「テナントの構成」を参照してください。

アクションリクエストタイプ

このセクションでは、特定の送信済みリクエストタイプの上書きがサポートされます。次のセクションのうち 1 つのみがある必要があります。

標準装備されているリクエストタイプ詳細を変更する場合、まず標準装備されているリクエストタイプのコピーを作成します。次に、新しいリクエストタイプを必要に応じて修正します。完了したら、新しいリクエストタイプを有効化し、このセクションを新しいリクエストタイプコードで更新できます。次に、標準装備されているリクエストタイプを無効化できます。

表 E-6　　アクションリクエストタイプ

設定名	テナント上書き	詳細
DB VM のリストア	いいえ	VM のリストアダッシュボードオプションと関連付けられているリクエストタイプコード。デフォルトは DBRESTVM です。
DB VM のリストアメッセージ	いいえ	このメッセージが提供される場合、VM をリストアする時の通知に関して使用されます。このエントリを省略した場合は、デフォルトのシステムメッセージが使用されます。この値のデフォルトは空です。
DB ファイルのリストア	いいえ	ファイルのリストアダッシュボードオプションと関連付けられているリクエストタイプコード。デフォルトは DBRESTFILE です。
DB ファイルのリストアメッセージ	いいえ	このメッセージが提供される場合、ファイルをリストアする時の通知に関して使用されます。このエントリを省略した場合は、デフォルトのシステムメッセージが使用されます。この値のデフォルトは空です。
DB マシンを保護解除	いいえ	マシンを保護解除ダッシュボードオプションと関連付けられているリクエストタイプコード。デフォルトは DBREMBACK です。

設定名	テナント上書き	詳細
DB 保護解除メッセージ	いいえ	このメッセージが提供される場合、保護解除を指定する時の通知に関して使用されます。このエントリを省略した場合は、デフォルトのシステムメッセージが使用されます。この値のデフォルトは空です。
DB ファイルリストアを登録する	いいえ	ファイルリストアを登録するダッシュボードオプションと関連付けられているリクエストタイプコード。デフォルトは DBREGDNS です。
DB ファイルリストア登録メッセージ	いいえ	このメッセージが提供される場合、ファイルリストアの登録を選択する時の通知に関して使用されます。このエントリを省略した場合は、デフォルトのシステムメッセージが使用されます。この値のデフォルトは空です。
DB 保護の登録をする	いいえ	保護の登録をするダッシュボードオプションと関連付けられているリクエストタイプコード。デフォルトは DBREGPROT です。
DB 保護の登録メッセージ	いいえ	このメッセージが提供される場合、保護の登録を選択する時の通知に関して使用されます。このエントリを省略した場合は、デフォルトのシステムメッセージが使用されます。この値のデフォルトは空です。
DB SQL のリストア	いいえ	SQL データベースのリストアダッシュボードオプションと関連付けられているリクエストタイプコード。デフォルトは DBRESTSQL です。
DB SQL のリストアメッセージ	いいえ	このメッセージが提供される場合、SQL をリストアする時の通知に関して使用されます。このエントリを省略した場合は、デフォルトのシステムメッセージが使用されます。この値のデフォルトは空です。
DB Oracle のリストア	いいえ	Oracle バックアップのリストアダッシュボードオプションと関連付けられているリクエストタイプコード。デフォルトは DBRESTORA です。
DB Oracle のリストアメッセージ	いいえ	このメッセージが提供される場合、Oracle をリストアする時の通知に関して使用されます。このエントリを省略した場合は、デフォルトのシステムメッセージが使用されます。この値のデフォルトは空です。
今すぐ DB バックアップメッセージ	いいえ	このメッセージが提供される場合、[今すぐバックアップ]が使用される時の通知に関して使用されます。このエントリを省略した場合は、デフォルトのシステムメッセージが使用されます。この値のデフォルトは空です。

設定名	テナント上書き	詳細
DB 保護メッセージ	いいえ	このメッセージが提供される場合、保護を選択する時の通知に関して使用されます。このエントリを省略した場合は、デフォルトのシステムメッセージが使用されます。この値のデフォルトは空です。

vCloud Director のインポート

この種のセクションには、特定の vCloud Director インスタンスからコンピュータをインポートして NetBackup Self Service に登録できるようにする vCloud Director のインポートプロセスの詳細が記載されています。個々の資格情報を使用するテナントベースでテナントにコンピュータをインポートします。vCloud Director インポートセクションは複数あります。

表 E-7

設定名	テナント上書き	詳細
vCloud Api	いいえ	この値は、`https://hostname/api/` 形式の vCloud Director API の URL に設定する必要があります。
場所	いいえ	コンピュータが登録される NetBackup バックアップサーバーの名前。
オンライン	いいえ	vCloud Director インスタンスがオンラインとみなされるかどうかを示します。Self Service では、オンラインでないインスタンスは使用されません。
Ignore SSL Certificate Errors (SSL 証明書エラーを無視する)	いいえ	このオプションを使用すると、Self Service で SSL 証明書が有効でない vCloud Director インスタンスに接続できるようになります。
vCloud ユーザー名	はい	テナントが vCloud Director API への接続に使用するユーザー名。各テナントに独自の資格情報がある必要があります。`userid@vOrg` の形式にする必要があります。テナントレベルでのみ設定する必要があります。
vCloud パスワード	はい	テナントの対応する vCloud Director パスワード。テナントレベルでのみ設定する必要があります。
保護タイプコード	いいえ	インポートされたコンピュータに適用される保護タイプ。
Use vDC Filter (vDC フィルタを使用する)	いいえ	vDC フィルタリングを有効にするには、このオプションを設定します。

設定名	テナント上書き	詳細
vDC フィルタ	いいえ	インポート時に vDC に適用されるフィルタ。このフィルタはカンマ区切りのリストで、vDC 名は大文字と小文字が区別されます。テナントレベルでのみ設定します。
表示名	いいえ	エンドユーザーのホームページでデフォルトのビューに表示される名前。
メタデータを含める	はい	インポート時にメタデータを含めるかどうかを決定します。

F

REST API

この付録では以下の項目について説明しています。

REST API について

REST API は、コンピュータの追加、保護、リストアなど、システムに対する管理処理と操作処理の両方をサポートします。

API のマニュアルはインストールディレクトリの SDK フォルダに入っています。API のマニュアルは、VOX (Veritas Open Exchange) でも入手できます。URL は、SDK ディレクトリの ReadMe.txt ファイルで参照できます。これは、ポータルの[NetBackup Self Service について (About NetBackup Self Service)]ページでも見つけることができます。

API のバージョン 6 は有効化されており、ユーザーの資格情報を使ってログオンする必要があります。

G

用語集

この付録では以下の項目について説明しています。

用語集

表 G-1　　用語集

用語	定義
今すぐバックアップ	マスターサーバーで一時ポリシーを作成し、それを即時バックアップ用にスケジュールする Self Service のユーザーアクション。テンプレートポリシーは後で削除されます。コンピュータがすでに保護され、スケジュール済みポリシー内に存在する場合、このオプションを使用して、そのポリシーを使用する即時バックアップを開始できます。
バックアップサーバー	バックアップサーバーは、NetBackup Master Server への接続を示します。バックアップサーバーは新しい UI 用語ですが、Rest API では引き続き「場所」が使用されます。
コンピュータ	ソリューションで認識される物理コンピュータまたは仮想コンピュータ。
顧客コード	NetBackup Self Service のテナントを特定するめに使用される一意のコード。このコードは、NetBackup のポリシー命名規則に使用されます。
イメージ同期	Self Service でコンピュータバックアップに関する情報が NetBackup から収集されるプロセス。

用語	定義
統合設定	統合設定は、Self Service ポータルで保持される値によって名前が付けられた設定のフレキシブルなストアです。すべての統合設定には、管理者ユーザーとして[管理 (Admin)]、[設定 (Settings)]、[統合設定 (Integration Settings)]からアクセスできます。統合設定がテナントレベルの例外で構成されている場合、[管理 (Admin)]、[組織 (Organization)]、[テナント (Tenant)]、[統合 (Integration)]からアクセスできます。
場所	場所は、NetBackup マスターサーバーへの接続を示します。この接続は、より一般な表現として、バックアップサーバーと呼ばれます。
マシン	ソリューションで認識される物理マシンまたは仮想マシン。
NetBackup Self Service	ソリューション全体を説明するために使用される用語。
NetBackup Self Service アダプタ	NetBackup との通信を行う Self Service システムの 2 番目の部分。
NetBackup Self Service ポータル	Self Service システムの最初の部分で、ソリューションのメインの Web サイト。
パネル	Self Service ポータルのホームページのサブ領域。ホームページウィジェットと呼ばれる場合もあります。
保護 (コンピュータ)	コンピュータを NetBackup ポリシーに追加して、定期的なバックアップをスケジュールする Self Service でのユーザーアクション。
保護レベル	保護レベルは、コンピュータに適用可能な保護のレベルを示します。保護レベルを構成することにより、ユーザーは NetBackup ポリシーに対して自分でスケジュールしたバックアップを保持できます。これは、各 NetBackup マスターサーバー上のテンプレートポシリーにマップされます。
保護タイプ	保護タイプにより、コンピュータを保護できるすべての方法が定義されます。この保護は、単一の保護レベル、または物理コンピュータと仮想コンピュータが混在する場合などは複数の保護レベルによって行うことがあります。スケジュールされた保護と 1 回限りのバックアップには、異なる保護レベルが必要になります。
NetBackup データの更新	イメージデータ、保護データ、および信号を再構築するためのコンピュータレベルの手動プロセスまたは自動プロセス。
マシンの登録	テナントのコンピュータに関する情報で Self Service システムを更新するために使用されるプロセス。
ファイル/フォルダのリストア	NetBackup でファイルまたはフォルダをリストアするジョブを作成する Self Service のユーザーアクション。

用語	定義
VM のリストア	NetBackup で仮想マシンをリストアするジョブを作成する Self Service のユーザーアクション。
サービスカタログ	Self Service ポータルのユーザーに表示されるホームページ。[管理 (Admin)]、[サービスカタログ & 通知 (Service Catalog & Notices)]、[サービスカタログ (Service Catalog)]から編集できます。
サービスプロバイダ	Self Service システムを管理する最上位の組織を指します。
テンプレートポリシー	ユーザーに対し有効なポリシーを作成するために使用されるマスターサーバー上の無効な NetBackup ポリシー。
テナント	ユーザーの組織グループ。企業シナリオ内のビジネスユニット、またはサービスプロバイダの顧客として使用されることがあります。ユーザーはすべてテナント内にある必要があります。
管理対象外 (コンピュータ)	保護の追加クラス。コンピュータをリストアし、その健全性を監視することができます。保護 (ポリシー管理) が NetBackup Self Service の外で処理されると想定します。
保護解除 (コンピュータ)	コンピュータが NetBackup ポリシーから削除される Self Service のユーザーアクション。
vCloud Director のインポート	vCloud Director からの自動インポートを許可するコンピュータソース。
Web サービス	ポータル用 API を使用して、テナント、ユーザーなどの追加を自動化できます。DAPI と呼ばれることもあります。